改訂 帝國新讀本 卷十

375.9
Ha7
資料一

41678
教科書文庫
4
810
41-1927
200030
1526

資料室 375.9 H27

文部省檢定濟

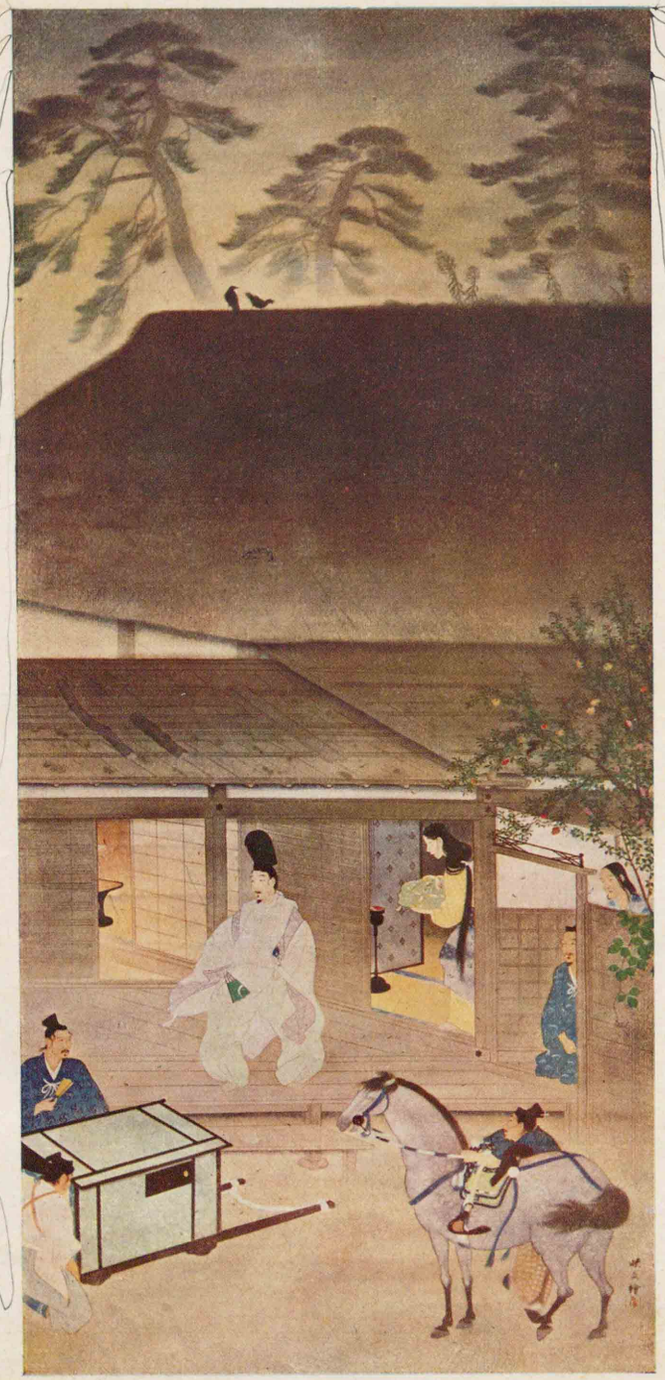
昭和二年十月二十七日　中學校國語科用

文學博士芳賀矢一編

改訂

帝國新讀本

東京　合資會社　冨山房發兌



池田の宿

松岡映丘筆

広島大学
教
53176
図書

改訂

帝國新讀本 卷十目次

一　秋の川（俳句新調）……島崎藤村……一
二　隅田川に寄する詞……永井潛……八
三　人及び人の力……鴨長明……一七
四　方丈記その一
　一　うたかた……一七
　二　安元の大火……一八
　三　治承の辻風……二〇
　四　都うつり……二〇
　五　養和の飢饉……二四
五　方丈記その二……鴨長明……二五

六　わづらひ……二五
七　閑居……二八
六　落花の雪……（太平記）……三三
新葉集の歌（自修文）……大町桂月……三八
七　菊花の約その一……上田秋成……四一
八　菊花の約その二……上田秋成……四六
九　友道……綱島梁川……五四
一〇　澄の江の浦……坪内逍遙……五九
一一　詩人杜甫……徳富蘇峰……六〇
一二　法成寺の造營……（榮華物語）……六四
一三　人間の價値……和辻哲郎……六八
一四　萬葉集の歌…………七四
民謠の話（自修文）……島木赤彦……七八

一五　古文學に見えた祖先の面影……五十嵐力……八五
一六　春は曙……清少納言……九一
四季……九一
ふるものは……九一
雲は……九二
あてなるもの……九二
木の花は……九三
香爐峰……九三
一七　舟旅……九六
別離……九六
海路……九七
都歸……九八
一八　蟻通の明神……一〇〇
一九　春秋の爭……清少納言……一〇四
津田左右吉……一〇八

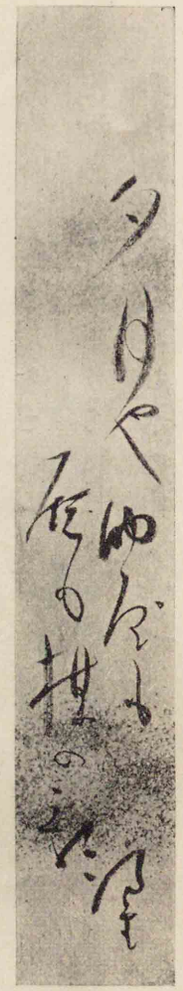
二〇　花と蝶……藤井高尚…一二六
花……一二六
蝶……一二六
二　船上山行幸……（増鏡）…一二八
日本文學（自修文）……一二一
三　現代の文學その一……千葉龜雄…一二六
三　現代の文學その二……千葉龜雄…一三三

改訂　帝國新讀本　卷十

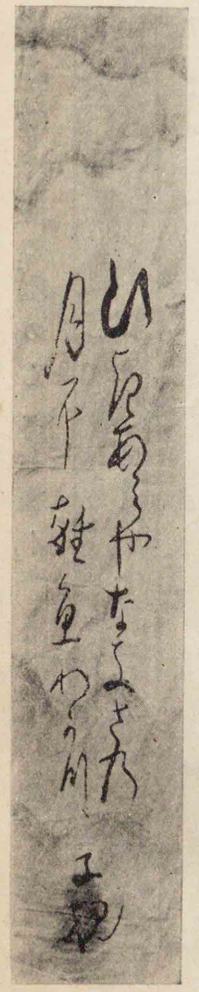
一　秋の川

元日や一系の天子富士の山。　鳴雪[一]

行く春やぼうぼうとして蓬原。　子規



鳴雪筆蹟



子規筆蹟

（一）内藤素行。伊豫松山の人。漢詩人でまた日本派を唱道した俳人。大正十五年歿、年八十。

夕月や納屋も厩も楳の影　鳴雪

ひきあみやなきさの月に雜魚わかつ　子規

遠山に日の當りたる枯野哉　虛子

(一)巖谷秀雄。小說家、お伽作家。東京の人。

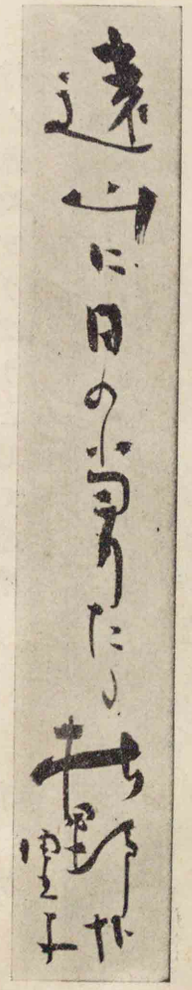
(二)志田義秀。文學士。成蹊高等學校教授。富山縣の人。

門川に流れ藻絶えぬ五月哉　碧

(三)松瀨彌三郎。日本派の俳人。大阪朝日新聞記者。大阪の人。

(四)尾崎德太郎。小說家。明治三十六年歿、年三十七。

初雷や籠の鶏のくゝと鳴く。　虛子



虛子筆蹟

大和路や雲雀おちこむ塔のかげ。　(一)小波

花畑春蒔の畝をうちにけり。　(二)素琴

五月雨や鴉草ふむ水の中。　碧梧桐

碧梧桐筆蹟

白き蝶野路に吹かるゝ薄暑かな。　(三)青々

山百合にそゝぐ大雨やほとゝぎす。　(四)井泉水

口あいて佐渡が見ゆると涼みけり。　紅葉

雨來らんとして頻にあかる花火哉　紅葉

(一)高田四十平。新傾向の俳人。兵庫縣の人。

(二)角田眞平。靜岡縣の人。大正八年歿、年六十四。

(三)大谷正信。文學士。廣島高等學校教授。松江の人。

(四)坂本四方太。文學士。鳥取市の人。大正六年歿、年四十五。

(五)藤井乙男。文學博士。京都帝國大學教授。淡路の人。

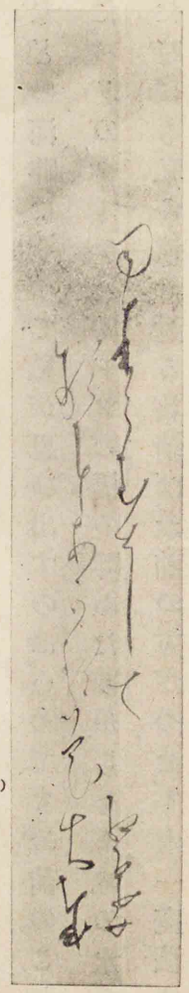
(六)大谷光演。眞宗大谷派前管長。

魚屑をかもめに投げつ冲膾。　(一)蝶衣

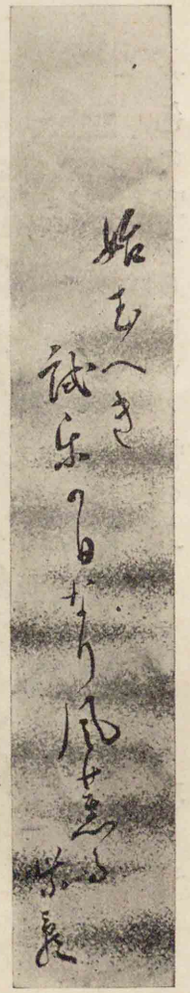
早稻は花の曉の露笠涼し。　(二)竹冷

一山にひゞく魚板や秋ゆふべ。　(三)繞石

語草すでに盡きぬる夜長かな。　(四)四方太



紅葉筆蹟



紫影筆蹟

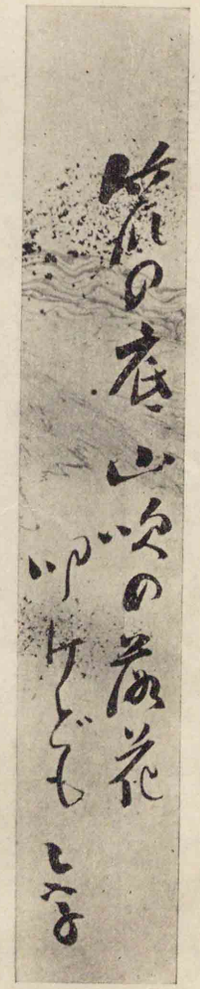
落葉降る音一しきり大伽藍。　(五)紫影

秋の川眞白な石を拾ひけり。　(六)漱石

一もじのここにさすらふ門流れ。　句佛

大いなる池に日あたる寒さかな。　癖三醉(一)

落葉ごと寒鮒網に入りにけり。　乙字(二)



乙字筆蹟

水色の空ひらけゆく雪の上。　瓊音

(一)岡木廉太郎。高崎市の人。
(二)大須賀績。文學士。福島縣の人。大正九年歿、年四十一。
笊の底山吹の落花叩けども　乙字
(三)Saône. フランスの東部にある川。
(四)Vienne. フランスの西部にある川。
(五)Garonne. フランスの南部にある川。
(六)Austerlitz.
(七)Seine.

二　隅田川に寄する詞

島崎藤村

流れよ、流れよ、隅田川の水よ。少年の時分からのお前の舊馴染が、またお前の懷裡(ふところ)へ歸つて來た。旅にある日ソーン(三)、ベンヌ(四)、ガロンヌ(五)などの河畔に立つて私が思ひ出すのは、いつでもお前のことだつた。パリのオステルリッツ(六)の橋の畔(たもと)あたりからセーヌ(七)の水を眺めた時にも、私の遠く送る旅情は、お前の方だつた。もう一度私はお前

の岸に歸つて來て、お前の水を見得ることを喜ぶ。私が旅に出た時分から見ると、お前は一層默つてしまつたやうな氣もする。お前の聲はどうしたらう。いつまでお前はそのやうに沈默を續けてゐるのだらう。お前の河岸の變遷と工業化とに壓せられて、お前の白魚が死に、お前の都鳥が飛去つたやうに、お前の聲も涸れはてたのだらうか。遙かに川上の方から渦卷き流れてくるお前の水がある限り、お前の詩が涸れはてようとは、どうしても思はれない。私はお前から溢れてくる詩を知りたい。お前の沈默を破つた聲を聞きたい。隨分お前も長い目で岸の變遷を眺めて來た。兩岸が武藏野であつた昔からのお前だ。そこに建てられた大きな都の發達を知りつくして來たお前だ。舊兩國が一切の交通の中心で、用をたすにも、ものを運ぶにも、舟の便利に賴らなければならない時代からのお前だ。お前は驚くべき大改革を眼のあたりに見て來た。江戸の崩壞を。政

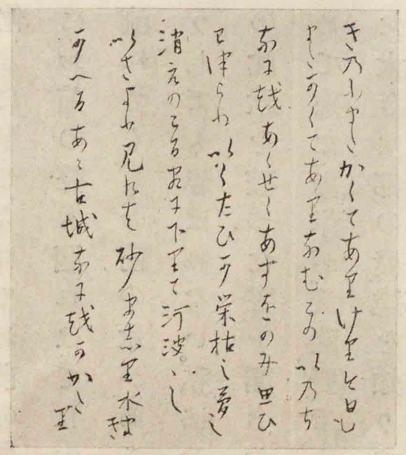
熾盛

きのふまたかくてありけり今日もまたかくてありなむこのいのちなにをあくせく明日をのみ思ひわつらふいくたひか榮枯の夢の消えのこる谷に下りて河波のいさよふ見れは砂まじり水まきかへるあゝ古城なにをかたり

確執

造形美術

治の改變を。憲法の制定を。廣く知識を世界に求めようことを。世界のありとあらゆる所から採得る限りのものを採らうことを。これがお前の見た維新當時に於ける熾盛(きかん)な精神ではなかつたか。新しいものがかくしてお前の岸へ押寄せて來た。アメリカからも。フランスからも。イギリスからも。ドイツからも。そして改良に次ぐに改良、破壞に次ぐに破壞を以てした結果、それ等の性質を異にしたものが、各自思ひ思ひの樣式と主張と確執とをもつて、雜然紛然たること、恰も植民地の町を見る如くにお前の兩側に移植された。時代の象徵とも見るべき造形美術、殊に建築を見わたすと、お前の岸にあつたものが餘りに温和しく、餘りに弱々しく、餘



島崎藤村筆蹟その一

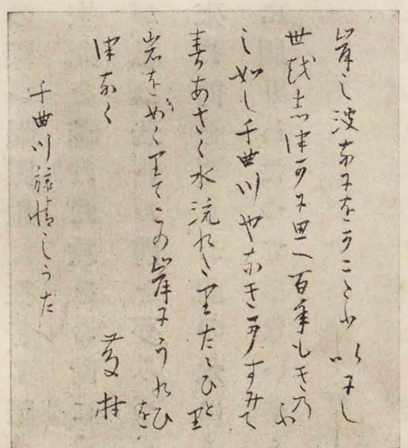
(一)Classic. 古典。

岸の波なにをかこたふいにし世をしつかに思へ百年もきのふの如し千曲川やなきかすみて春あさく水流れたりたたひとり岩をめくりてこの岸にうれひをつなく

藤村

千曲川旅情のうた

りに纖細で、新しく西洋からはいつて來た組織的なものの爲に、何となく蹂躙されてしまふやうな氣がして、傷々しくてならない。今になつてこの不調和を嘆くのは遲いかも知れない。しかし、我々日本人が、餘りにクラシック(一)を棄過ぎたと氣付くことは、決して遲いとはいへない。我々は廣く知識を世界に求めるほどの鋭意と同情とに富んでゐる。たゞ我々はそれを受容れるに當つて、強い判斷力を缺いた。言葉を換へていへば、歷史的の意志を缺いた。それが我々の缺點だ。我々は自己の支配者ではなくなつてしまつてゐた。たゞ新しいものはいつてくるに委せてゐた。お前の岸にある不思議な不統一。私はそれをお前に問ひたい。お前が眼の



島崎藤村筆蹟その二

あたり見た驚くべき大改革は、人の心に『推移』をばもたらしたらう。しかしながら、人の心の奥に『改革』をもたらしたらうか。」と。それを思ふと、私はいひ難い幻滅の悲哀に打たれる。お前はセーヌでもなく、テームスでもなく、やはり一番親みの深い隅田川だ。往昔、多感多情な詩人(一)が嘴の紅い都鳥を見て、妻の生死を尋ねた歌をお前に遺したそれほど古い歴史のあるお前だが、私は若いお前を夢みつゝ、それを頼りにして、遠い旅から歸つて來た。何となくお前の水はまだ薄暗い。太陽の光線はまだお前の岸に照りわたつてゐないやうな氣がする。お前の日の出が見たい。

——海——

(一)在原業平。

三　人及び人の力

永井　潛

生命は最も偉大な謎であり、生活體は確かに宇宙の驚異である。土に落ちる一粒の種子、たとひそれには眞珠の光がなく、寶玉の輝きがなくとも、靜かにこれを觀ずる時、我等はそのものに於て、眞珠よりも、寶玉よりも、より尊く驚くべき或ものの存在を認めずに居られない。日が温め、露が潤ほす時、愛らしい雙葉が芽ざす。絹のやうな白い根がおろされる。伸びる。太る。眼も眩むばかり美しい花を開く。枝もたわゝに實を結ぶ。彼は實に、命のない土から命のあるものを造り出す。そして枯死する。さりながら、常に新たな第二の我を生じて、終に永遠に生延びるのである。一粒の種子——その中には長への命の力を秘めて居る。

あらゆる生物の中、最も進化したところの人間に於ては、殊にその感を深くせざるを得ない。ギリシャの大哲學者ソクラテースは、常に「自分自らを知れ。」と教訓した。自分自らを知ること、人間が人間自身を徹底的に知ることが、即ち人生の最後の目的であらう。世の中に不思議なものは少くないが、人間くらゐ不思議な、人間くらゐ

大きな、人間くらゐ尊いものがまたとあらうか。この意味に於て、自分自らを知ることが、人間をして人間たらしめるに最も大切な所以であると信ずるのである。ドイツの文豪シルレルは、かの不朽の傑作である「鐘の歌」の中に、「自分がいかなることを成就し得るかを、嘗て考慮しないやうなつまらない人は、輕蔑されなければならない。」といふことを述べて居るが、これもまた、人間がいかに自尊し自重しなければならないかを敎へたものに外ならない。若し世の中にスフィンクスといふものがあつて、大なる謎を與へて居るとしたならば、その最も大なる謎は、「人間」といふ謎でなければならない。

この偉大な謎である人間を形態的方面から觀察すると、その大切な特色は、腦髓殊に大腦の拔群の發達であるが、更に機能的の方面から動物と比較して見るならば、私はまづ第一にかういはうとする、「人間と動物との機能的の差別は、人間は文化(カルチユア)をもつて居るが、

機能的

(Nature.)

礌々

動物は自然(ネーチユア)の狀態にある。」抑も文化とは何ぞといふに、人間が自分の意思によつて、自然を左右するの謂である。動物は自然のまゝに甘んじて居る。然るに人間は自然のまゝでは滿足しないで、その上に自己の意思を加へようとする。これが人間の人間たる所以である。例へば、自然は斧鉞の嘗て入らない大森林のやうなものである。文化は一木一石悉く人間の趣味を現した庭園のやうなものである。礌々(らい)なる一塊の大理石は自然であるが、文化はその大理石に、藝術家が思ふまゝに手を加へて造り出した立派な彫刻物である。即ち自然のまゝでは足れりとしないで、自然を支配し、自然を利用しようとして、ここに文化が始る。これが人間の尊い點である。

抑、自然の出來事は、全くきまりきつて動かすことのできない、型にはまつたところの規則によつて支配されるものである。けれども文化はさうでない。文化はそこに人間の自由の意志が働き、人間

が或目的を追うて、自然の上に自己の意志を實現して行くのである。自然界は一大機械であつて「昨日然り、今日然り、明日もまた然らん。」とバークレー僧正(1)がいつたやうに、どこまでも動きなき通有な自然法の鐵案によつて縛られて居る。けれども、文化は決してかく簡單なものではない。文化は目的に依つて成立つが、自然はたゞ法則によつて動いて行く。勿論人間もまた一種の自然物であつて、自然界の現象として見れば、人間も一個の生物であり、現象界に通有な同一の物質、同一の力、同一の理法によつて左右されて居るのであるけれども、人間を文化を作るところの對象物として、目的の上より、價値の上より考察する時に、ここに全然他の自然物と區別しなければならなくなつてくる。

かやうに文化を作ることが人間の仕事であり、文化的生活は人間の努力の結晶である。けれども、この人間の努力、人間の仕事には、

(1) Berkeley. イギリスの説教家。

鐵案

人によつて種々階梯がある。即ち未開人に於ては、この努力は頗る僅微で、彼等のもつてゐる固有の文化は、まだまだ自然そのものに近いのである。然るに人間のこの努力が漸次に強大となり、自然を超越して、彼の力を自然の上に實現することが著しくなるにつれて、文化は益〻高くなつてくるのである。未開人に於ける努力は、たゞ單に自己を生存して行くこと、就中自分の生命を繋いで行く爲に、直接必要な食物を探し求めることに限られてゐる。隨つて彼等の精神生活には、たゞ自己といふ考、たゞ現在といふ考しかない。未來もなければ、また過去もないのである。唯一の望としては自己生存があり、種族の保續があるのみで、殆ど動物と選ぶところはない。かくて野蠻人の生活は全然利己主義である。自己の生命を保續する爲には、他人の肉を食つても平然としてゐるものである。

が、人間はいつまでもこの狀態に止つてはゐない。しかも昨日な

く明日なき彼等には、宗教もなければ道德もない。彼等がこれを脫却して、漸次に文化に進むのは、決して外から餘儀なくされるのではない。實に人間本然の要求、人間の心の中にある止むに止まれぬ尊い衝動が、これに鞭を與へてゐるのである。(一)フィヒテはいはく「誰しもが文化に導かれるのではない。自分自身が文化を作るのである。」と。即ち天は自ら助くるものを助くるのである。人間に於てこの尊い內的衝動の根柢をなすものは何かといふに、その優越せる精神作用が、雜駁な自然現象に對して抽象概念を作り、混亂より序律に、雜駁より統一に、偶然より意思の自在に移り行くことにあるのである。それが抑も人間と動物との間に、嚴格な區別を起した大原因であり、そしてまたこのことが、科學の根柢であり、哲學の根柢であり、宗教の根柢であり、道德の根柢であると信ずる。

これを社會生活について考へて見ると、人間が單に飢餓の奴隸となり、自己生存にのみ孜々してゐた時代には、たゞ現在があるだけで、過去もなく、將來もなく、隨つて時間の觀念も發達しない。單に自己あるだけで、他を顧る餘裕がない。然るに子孫繁榮といふことが、人間生活に於て極めて重要な地位を占めるやうになり、それが理性的、永續的の色彩を帶び來つて家庭を作り、子女を敎養するやうになると、ここに始めて博愛、犧牲、同情、從順といふやうな道德倫理の根柢が築かれ、そしてまた產業といふ永續的の目的を有した仕事が起つてくる。思ふに自己の飢を滿たすばかりでなく、進んで一家の飢を滿たさなければならないといふ希望が、產業的努力を喚起する上に最も有力な動機を與へる。かくて獵者の生活は牧者の生活に、牧者の生活は農業者の生活に移つて行く。そして眞の產業が始めて堅固な立場を見つける。

永續的產業の發達は時の觀念を喚起し、秩序の觀念を喚起し、所

〔Johann Gottlieb Fichte. ドイツの哲學者。(西曆一七六二年—一八一四年)〕

雜駁

喚起す

有の觀念を喚起し、數の觀念を喚起する。そしてそれは皆一の「努力」の賜物であり、文化生活の基源をなすものである。この大なる努力に動機を與へるものは、上述の如く自己のみでなく、一家族の維持生存といふことである。

エマーソン(一)はいはく、「雪なき所に文化なし。」と。雪のない所に文化のないのは、即ち文化が努力の賜物であることを最も巧妙に言表したものである。人間が大自然の温かい懷に抱かれて、たゞ自分の飢を滿たし、たゞ現在に活きるには十分の食物があつて、何等の努力をも必要としないやうな狀態では、決して産業は起らない、また起る必要もない。しかしながら、人間が困難と戰ひ、自己及び自己の種族の保續を確實にして行かなければならないといふ必要を感ずると、ここに始めて強い鞭が彼の頭に加へられて、文化生活の緒を喚起することになるのである。

(一) Ralph Waldo Emerson. アメリカの詩人、哲學者。(西暦一八〇三年―一八八二年)

うたかた

棟を並べ甍を爭ふ

四　方丈記 その一

鴨長明

一　うたかた

ゆく川の流は絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しく止ることなし。世の中にある人と住家と、また此の如し。

玉敷の都のうちに棟を並べ甍を爭へる、たかきいやしき人のすまひは、代々を經てつきせぬものなれど、これをまことかと尋ぬれば、昔ありし家は稀なり。あるは去年破れて今年は造り、あるは大家亡びて小家となる。住む人もこれに同じ。所も變らず人も多かれど、いにしへ見し人は、二三十人がうちに僅かに一人二人なり。且

玉敷の都（伊藤龍涯筆）

に死し夕べに生まるゝならひ、たゞ水の泡にぞ似たりける。

知らず、生まれ死ぬる人、いづ方より來りていづ方へか去る。また知らず、假のやどり誰が爲に心を惱まし、何によりてか目を喜ばしむる。その主人と住家と無常を爭ひ去るさま、いはば朝顏の露に異ならず。あるは露落ちて花殘れり。殘ると雖も朝日に枯れぬ。あるは花凋みて露なほ消えず。消えずと雖も夕べを待つことなし。

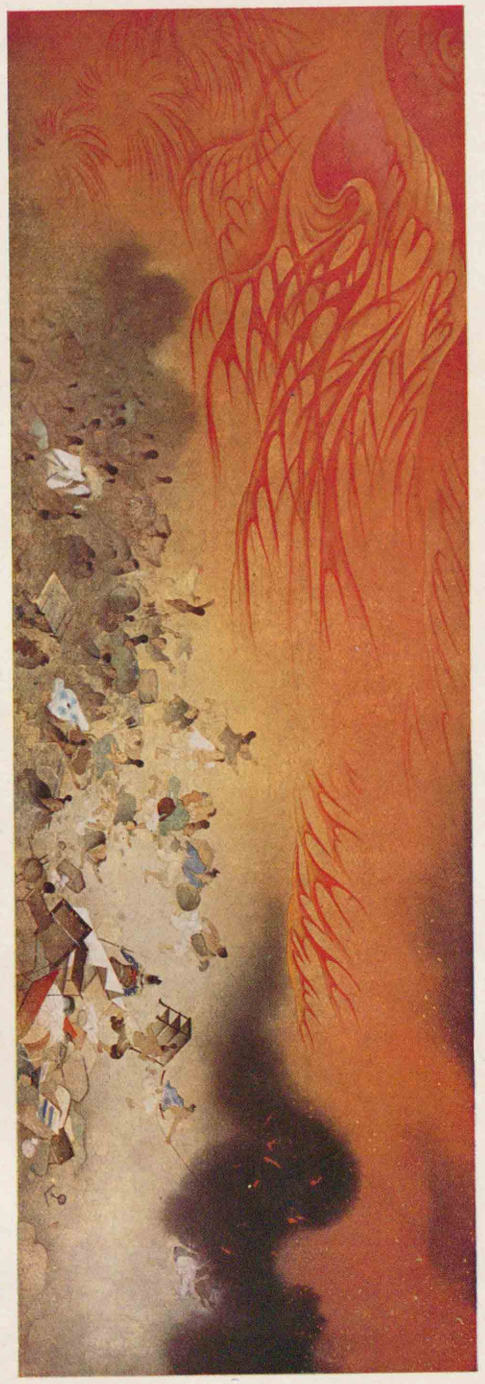
凡そものの心を知れりしよりこの方、四十餘りの春秋を送れる間に、世の不思議を見ること、稍たびたびになりぬ。

無常を爭ひ去る

二　安元の大火

去にし安元[一]三年四月二十八日かとよ、風烈しく吹きて、靜かならざりし夜、戌の時ばかり、都のたつみより火出で來て、いぬゐに至る。はてには朱雀門、大極殿、大學寮、民部の省まで移りて、一夜がほどに塵灰となりにき。火元は樋口富の小路とかや、病人を宿せる假屋よ

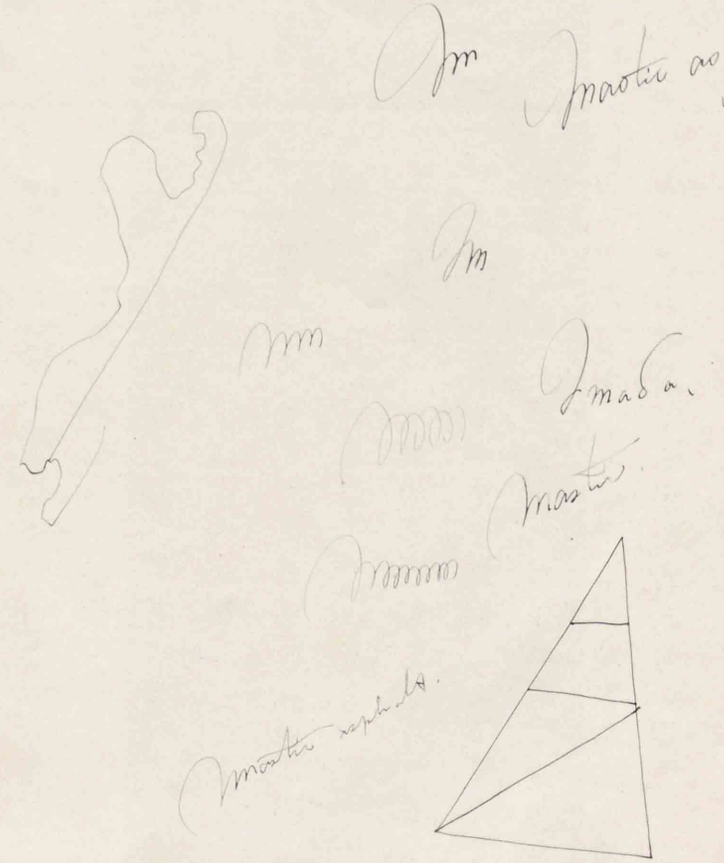
(一)高倉天皇の御代(一八三七年)。



火業の元安　伊藤龍華

あぢきなし

り出で來けるとなん。吹迷ふ風にとかく移り行くほどに、扇を廣げたるが如く末廣になりぬ。遠き家は煙に咽せび、近きあたりはひたすら焔を地に吹きつけたり。空には灰を吹立てたれば、火の光に映じてあまねく紅なる中に、風に堪へず吹切られたる焔、飛ぶが如くにして、一二町を越えつゝ移り行く。そのなかの人、現心あらんや。あるは煙に咽せびて仆れ伏し、あるは焔にまぐれて忽ちに死にぬ。あるはまた纔かに身ひとつからくして遁れたれども、資財を取出づるに及ばず、七珍萬寶さながら灰燼となりにき。その費いくそばくぞ。このたび公卿の家十六燒けたり。ましてその外は數を知らず。すべて都のうち、三分が一に及べりとぞ。男女死ぬるもの數千人、馬牛のたぐひ邊際を知らず。人の營皆おろかなるうちに、さしも危き京中の家を造るとて、寶を費し心を惱ますことは、すぐれてあぢきなくぞはべるべき。



(一)高倉天皇の御代(一八四〇年)。

業風

三　治承の辻風

また(一)治承四年卯月二十九日の頃、中の御門、京極のほどより大きなる辻風起りて、六條わたりまで、いかめしく吹きけることはべりき。三四町をかけて吹きまくる間に、そのうちに籠れる家ども、大きなるも、小さきも、一つとして破れざるはなし。さながらひらに倒れたるもあり。桁、柱ばかり残れるもあり。また門の上を吹放ちて、四五町がほどに置き、また垣を吹拂ひて、隣と一つになせり。況んや家の内の寶數をつくして空にあがり、檜皮、葺、板のたぐひ、冬の木の葉の風に亂るゝが如し。塵を煙の如く吹立てたれば、すべて目も見えず。夥しく鳴りとよむ音に、ものいふ聲も聞えず。かの地獄の業風なりとも、かくこそはとぞ覺えける。

四　都うつり

また同じ年の六月の頃、俄に都うつりはべりき。いと思の外なりしことなり。おほかたこの京のはじめを聞けば、嵯峨天皇の御時都と定まりにけるより後、すでに數百歳を經たり。ことなる故なくて、たやすく改るべくもあらねば、これを世の人たやすからず憂へあへるさま、ことわりにも過ぎたり。されど、とかくいふかひなくて、御門よりはじめ奉りて、大臣公卿、悉く移り給ひぬ。世に仕ふるほどの人、誰かひとり故郷に殘り居らん。官位に思をかけ、主君のかげをたのむほどの人は、一日なりともとく移らんとはげみあへり。時を失ひ、世にあまされて期するところなきものは、愁へながら止りゐたり。

軒を爭ひし人のすまひ、日を經つゝ荒行く。家はこぼたれて淀川に浮かび、地は目の前に畑となる。人の心皆改りて、たゞ馬鞍をのみ重くす。牛車を用とする人なし。西南海の所領をのみ願ひ、東北國の庄園をば好まず。

木の丸殿

その時自ら事のたよりありて、津の國今の京に至れり。所のありさまを見るに、その地ほどせばくて、條里を割るに足らず。北は山に沿ひて高く、南は海に近くて下れり。浪の音常にかまびすしくて、鹽風殊に烈しく、内裏は山の中なれば、かの木の丸殿もかくやと、なかなかやうかはりて、優なる方もはべりき。日々にこぼちて、川もせきあへず運び下す家は、いづくに作れるにかあらん、なほ空しき地は多く、作れる屋は少し。故郷はすでに荒れて、新都は未だ成らず。ありとしある人、皆浮雲の思をなせり。もとよりこの所にゐたるものは、地を失ひて憂へ、今移り住む人は、土木のわづらひあることを歎く。道のほと

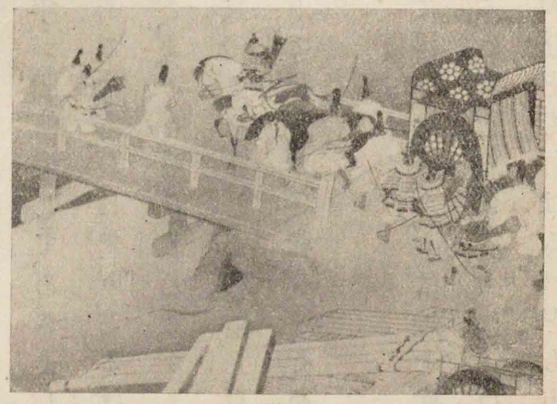
都うつり（伊藤龍涯筆）その一

都の手ぶり

瑞相

りを見れば、車に乘るべきは馬に乘り、衣冠布衣なるべきは直垂を着たり。都の手ぶり忽ちに改りて、たゞひなびたる武士に異ならず。これは世の亂るゝ瑞相とか聞きおけるもしるく、日を經つゝ世の中うき立ちて、人の心も治らず、民の憂遂に空しからざりければ、同じ年の冬、なほこの京に歸り給ひにき。されどこぼちわたせりし家どもは、いかになりにけるにか、悉くもとのやうにも作らず。

ほのかに傳へ聞くに、いにしへの賢き御代には、憐みをもて國を治め給ふ。即ち御殿に茅を葺きて、軒をだにとゝのへず、煙の乏しきを見給ふ時は、限りある貢物をさへ免されき。これは民を惠み、世を



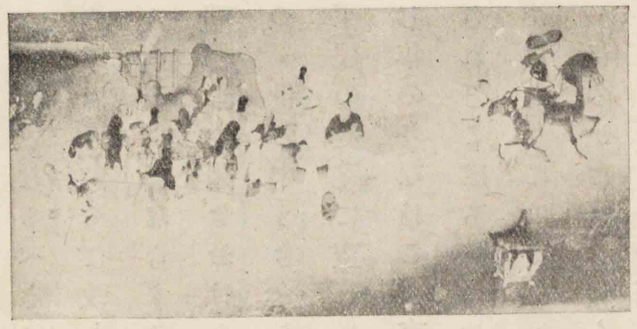
都うつり（伊藤龍涯筆）その二

たすけ給ふによりてなり。今の世の中のありさま、昔になぞらへて知りぬべし。

五　養和の飢饉

また養和(一)の頃かとよ、久しくなりてたしかに覺えず、二年が間飢渴して、あさましきことはべりき。あるは春夏日でり、あるは秋冬大風大水など、よからぬことどもうち續きて、五穀悉く實のらず、空しく春耕し、夏植うる營のみありて、秋刈り冬収むるぞめきはなし。

これによりて國々の民、あるは地を捨てて境を出で、あるは家を忘れて山に住む。さまざまの御祈はじまりて、なべてならぬ法ども行はるれども更に



養和の飢饉（伊藤龍涯筆）

(一)安德天皇の御代（一八四一年）。

ぞめき

なべてならぬ

そのしるしなし。

京のならひ、何わざにつけても、源は田舍をこそ賴めるに、絶えて上るものなければ、さのみやはみさをもつくりあへん。念じわびつつ、さまざまの寶物かたはしより捨つるが如くすれども、更に目見たつる人もなし。たまたまかふるものは金を輕くし、粟を重くす。乞食道のべに多く、憂へ悲しむ聲耳に滿てり。

さのみやはみさをもつくりあへん

さきの年此の如く、からくして暮れぬ。あくる年は立直るべきかと思ふに、あまさへ疫病うちそひて、まさるやうに跡かたなし。

あまさへ

五　方丈記　その二

六　わづらひ

すべて世のありにくきこと、我が身と住家とのはかなくあだなるさま此の如し。況んや所により身のほどに隨ひて、心を惱ますこと

ありにくきこと

すぼし

念々に動く

と、擧げて數ふべからず。

若しおのづから身數ならずして、權門の傍に居るものは、深く悅ぶことはあれども、大いに樂しぶに能はず。歎ある時も、聲をあげて泣くことなし。進退安からず、立居につけて恐れ戰く。例へば、雀の鷹の巢に近づけるが如し。若し貧しくして富める家の隣に居るものは、朝夕すぼき姿を耻ぢて、諛ひつゝ出で入る。妻子僮僕の羨めるさまを見るにも、富める家の人のないがしろなる氣色を聞くにも、心念々に動きて、時として安からず。若しせばき地に居れば、近く炎上する時その害を遁るゝことなし。若し邊地にあれば、往反煩多く、盜賊の難はなれ難し。勢あるものは貪慾深く、ひとり身なるものは人に輕しめらる。寶あればおそれ多く、貧しければなげき切なり。人を賴めば身他の奴となり、人をはごくめば心恩愛につかはる。世に從へば身苦し。また從はねば狂へるに似たり。いづれの所をしめ、いかなるわざをしてか、しばしもこの身を宿し、たまゆらも心を慰むべき。

たまゆらも

(一)「住みわびて我さへ軒の忍草、しのぶかたがたしげきやどかな。」(金葉集、周防内侍)

(二)長明が五十歳の春。後鳥羽天皇の承久の頃。

我が身父方の祖母の家を傳へて、久しくかの所に住む。その後緣かけ身衰へて、忍(一)ぶ方々しげかりしかば、終に跡とむることを得ずして、三十餘りにして、更に我が心と一つの庵を結ぶ。これをありしすまひになずらふるに、十分が一なり。たゞ居屋(かや)ばかりを構へて、はかばかしくは屋を造るに及ばず。僅かに築地をつけりと雖も、門たつるにたづきなし。竹を柱として、車宿りとせり。雪降り風吹く毎に危からずしもあらず。所は河原近ければ、水の難深く、白波の恐も騷がし。

すべてあらぬ世を念じ過しつゝ、心を惱ませることは、三十餘年なり。その間をりをりのたがひめに、おのづから短き運をさとりぬ。すなはち五十(二)の春を迎へて家を出で、世を背けり。もとより妻子な

よすが

(一)名小鹽山。山城國(京都府)乙訓郡に在る。京都市の西。

(二)土御門天皇建永の頃。

(三)「亦猶下行人之造二旅宿一老蠶之成中獨繭上矣。其住幾時乎。」(慶滋保胤、池亭記)

(四)山城國(京都府)宇治郡木幡山の東北。

ければ捨難きよすがもなし。身に官祿あらず、何につけてか執をとどめん。空しく(一)大原山の雲にいくそばくの春秋をか經ぬる。

七　閑居

ここに六十の露消え方に及びて、更に末葉の宿りを結べることあり。いはば、(三)旅人の一夜の宿りを造り、老いたる蠶の繭を營むが如し。これを中頃の住家になずらふれば、また百分が一にだも及ばず。とかくいふほどに、齡は年々に傾き、住家はをりをりにせばし。その家の有樣世の常にも似ず。廣さは僅かに方丈、高さは七尺が内なり。所を思ひ定めざるが故に、地を占めて造らず。土居を組み、打覆を葺きて、繼目毎に掛がねをかけたり。若し心に適はぬことあらば、易く外に移さんが爲なり。その改め造る時いくばくの煩かある。積むところ僅かに二輛なり。車の力を報ゆる外は、更に他の用途いらず。

いま(四)日野山の奥に迹を隱して後、南に假の日がくしをさしいだして、竹の簀子を敷き、その西に閼伽棚を作り、内には西の垣に沿へて、阿彌陀の畫像を安置しまつり、落日を受けて眉間の光とす。かの帳の扉に普賢並びに不動の像を掛けたり。北の障子の上に小さき棚を構へて、黑き皮籠三四合を置く。即ち和歌、管絃、(一)往生要集如きの抄物を入れたり。傍に箏、琵琶おのおの一張を立つ。所謂折箏、繼琵琶これなり。東に沿へて蕨のほどろを敷き、つかなみを敷きて夜の床とす。東の垣に窓を開けて、ここに文机をいだせり。枕の方にすびつあり。これを柴折りくぶるよすがとす。庵の北に小地を占め、あばらなる姫垣を圍ひて園とす。即ちもろもろの藥草を植ゑたり。假の庵のありさま此の如し。

鴨長明

眉間の光

(一)六卷。源信僧都の著。

つかなみ

その所のさまをいはば、南に寛あり、岩を疊みて水を溜めたり。林軒近ければ、つま木を拾ふに乏しからず。名を外山といふ。正木のかづら迹を埋めり。谷しげけれど西は晴れたり、觀念のたよりなきにしもあらず。春は藤浪を見る、紫雲の如くにして、西の方に匂ふ。夏は子規を聞く、語らふ毎に死出の山路を契る。秋は日ぐらしの聲耳に滿てり、空蟬の世を悲しむかと聞ゆ。冬は雪を憐む、積り消ゆるさま罪障に喩へつべし。若し念佛もの憂く、讀經まめならざる時は、自ら休み、自ら怠るに妨ぐる人もなく、また耻づべき友もなし。ことさらに無言をせざれども、ひとり居れば口業を修めつべし。必ず禁戒を守るとしもなけれども、境界なければ何につけてか破らん。若し迹の白波に身を寄するあしたには、岡の屋に行交ふ船を眺めて、滿沙彌が風情をぬすみ、若し桂の風葉を鳴らす夕べには、潯陽の江を想ひやりて、源都督のながれをならふ。若し餘りの興あれば、しばしば

罪障
(一)山城國（京都府）紀伊郡。宇治川の東岸。
(二)沙彌滿誓。
(三)「潯陽江頭夜送客。楓葉荻花秋瑟瑟。」（白樂天、琵琶行）
(四)桂大納言源經信。琵琶の名手。嘉保元年（一七五四年）太宰權帥に貶せられた。都督は太宰帥を唐風に呼ぶ稱。

松の響に秋風の樂をたぐへ、水の音に流泉の曲をあやつる。藝はこれ拙けれども、人の耳を喜ばしめんとにもあらず。ひとり調べ、ひとり詠じて、みづから心を養ふばかりなり。

幽棲（伊藤龍涯筆）

大方この所に住みそめし時は、あからさまと思ひしかど、今すでに五とせを經たり。假の庵も稍ふる屋となりて、軒には朽葉深く、土居に苔むせり。自らことの便に都のさまを聞けば、この山に籠りゐて後、やんごとなき人の隱れ給へるもあまた聞ゆ。ましてその數ならぬたぐひ、つくしてこれを知るべからず。たびたびの炎上に亡びたる家またいくそばくぞ。たゞ假の庵のみのどけくして恐なし。

ほどせばしと雖も夜臥す床あり、晝居る座あり、一身を宿すに不

(一)(二)共に琵琶の名曲。

あからさま

がうな

足なし。がうなは小さき貝を好む。これよく身を知るによりてなり。みさごは荒磯に居る。即ち人を恐るゝが故なり。我また此の如し。身を知り世を知れゝば、願はず、まじらはず、たゞ靜かなるを望とし、愁なきを樂みとす。

それ三界はたゞ心一つなり。心若し安からずば、牛馬、七珍もよしなく、宮殿、樓閣も望なし。今寂しき住居一間の庵、みづからこれを愛す。おのづから都に出でては、乞食となれることを耻づと雖も、歸りてここに居る時は、他の俗塵に着することをあはれぶ。

若し人このいへることを疑はば、魚鳥のありさまを見よ。魚は水に飽かず、魚にあらざればその心を知らず。鳥は林を願ふ、鳥にあらざればその心を知らず。閑居の氣味もまた此の如し。住まずして誰かさとらん。

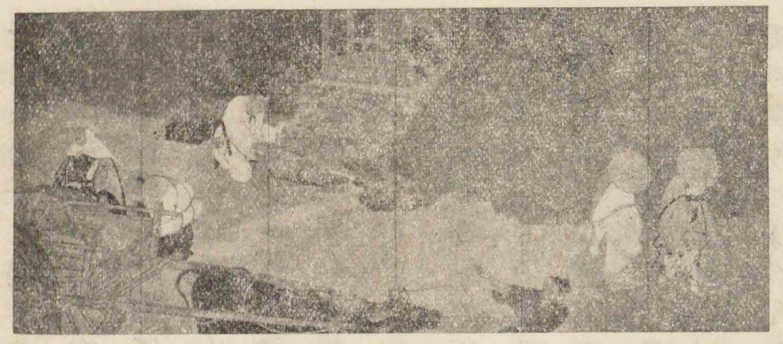
(一)「またや見ん交野のみ野のさくら狩、花の雪ちる春の曙。」(新古今集、藤原俊成)

(二)河内國(大阪府)北河内郡。

(三)「朝まだき嵐の山のさむければ、紅葉の錦きぬ人ぞなき。」(拾遺集、藤原公任)

(四)近江國(滋賀縣)滋賀郡に在る。

(五)「貢物たえずそなふる東路の、勢多の長橋音もとゞろに。」(風雅集、平兼盛)



關の清水　(伊東紅雲筆)

六　落花の雪

落花の雪に踏迷ふ、交野(二)の春の櫻狩、紅葉(三)の錦を着て歸る、嵐の山の秋の暮、一夜をあかすほどだにも、旅寢となればもの憂きに、恩愛の契淺からぬ、我が故郷の妻子をば、行方も知らず思ひ置き、年久しくも住馴れし、九重の帝都をば、今を限りと顧て、思はぬ旅に出で給ふ、心の中ぞ哀なる。

憂きをば止めぬ逢坂(大阪)の、關の清水に袖濡れて、末は山路を打出(四)の濱、冲を遙かに見わたせば、潮ならぬ海にこがれ行く、身をうき舟のうき沈み、駒(五)もとゞろと踏鳴らす、勢多の長橋うち渡り、行交ふ人にあふみ路や、世

(一)「近江より朝たちくれば、うねの野に、田鶴ぞなくなる明けぬこの夜は。」(古今集、大歌所の歌)

(二)「白露も時雨もいたく守山は、下葉のこらず色づきにけり。」(古今集、紀貫之)

(三)近江國(滋賀縣)蒲生郡安土村の東南。

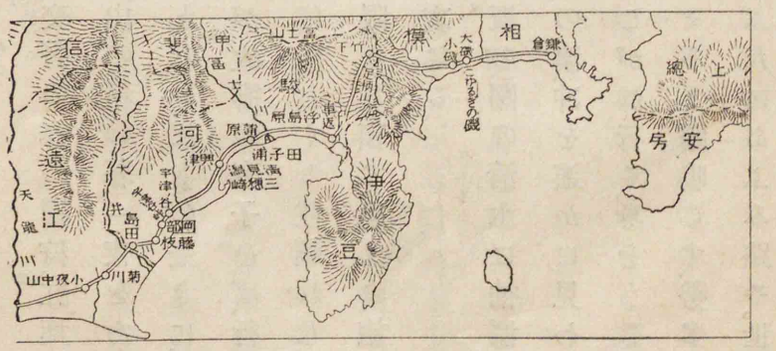
(四)「うちわたす今や汐干になるみ潟、舟の聲も通はず。」(夫木集、常磐井入道)

(五)尾張國(愛知縣)愛知郡の西方に在つた江灣の稱。今の笠寺、星崎の南。

捨小舟

をうねの野に鳴くたづも、子を思ふかと哀なり。時雨もいたく守山の、木の下露に袖濡れて、風に露ちる篠原や、篠わくる道を過行けば、鏡の山はありとても、涙に曇りて見えわかず。ものを思へば夜の間にも、老その森の下草に、駒を止めて顧る、故郷を雲や隔つらん。

番場、醒が井、柏原、不破の關屋は荒れはて、なほもるものは秋の雨の、いつか我が身のをはりなる、熱田の八つるぎ伏拜み、汐干に今や鳴海潟、傾く月に道見えて、明けぬ暮れぬと行く道の、末はいづくと遠江、濱名の橋の夕汐に、ひく人もなき捨小舟、沈みはて



(一)遠江國(靜岡縣)天龍川の東岸に在る。古は西岸に在つた。

(二)安德天皇の御代(一八四年)。

(三)遠江國(靜岡縣)榛原郡金谷と日坂の間の坂嶺。昔東海道の往還であつた。

いばゆ

(四)「年たけてまたこゆべしとおもひきや、命なりけり小夜の中山」(新古今集、西行法師)

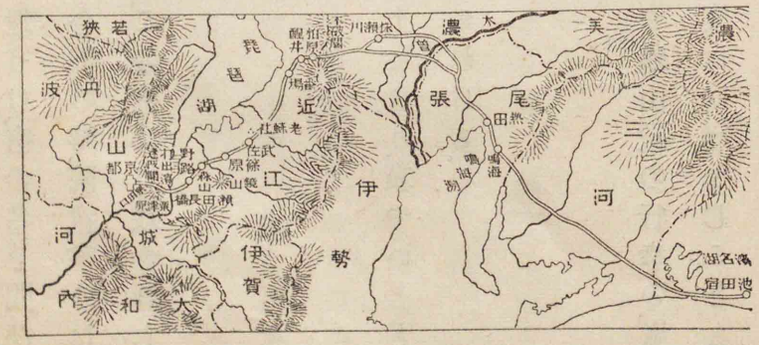
亭午

ぬる身にしあれば、誰か哀と夕暮の、入相なれば今はとて、池田の宿に着き給ふ。

元暦元年の頃かとよ、重衡の中將の、東夷の爲に捕はれて、この宿にやどり給ひにし、その古の哀までも、思ひ殘さぬ涙なり。

旅館の燈かすかにして、鷄鳴曉を催せば、匹馬風にいばえて、天龍川をうち渡り、小夜の中山越えゆけば、白雲道を埋み來て、そことも知れぬ夕暮に、家郷の天を望みても、昔西行法師が、「命なりけり。」と詠じつゝ、二たび越えし跡までも、羨ましくぞ思はれける。

隊行く駒の足早み、日すでに亭午にのぼれば、かれひまゐらするほどとて、輿を庭前



にかき止む。ながえをたゝきて警固の武士を近づけ、宿の名を問ひ給ふに、「菊川と申すなり。」と答へければ、承久の合戰の時、院宣書きたりし咎によりて、光親卿關東へ召下されしが、この宿にて殺されし時、

昔南陽縣菊水。　汲下流而延齡。
今東海道菊川。　宿西岸而終命。

と書きたりし、遠き昔の筆の跡、今は我が身の上になり、哀やいとどまさりけん、一首の歌を詠じて、宿の柱にぞ書かれける。

古もかゝるためしをきくがはの
おなじながれに身をや沈めん

大井川を過ぎ給へば、都にありし名を聞きて、亀山殿の行幸の、嵐の山の花盛、龍頭鷁首の舟に乗り、詩歌管絃の宴にはべりしことも、今はふたたび見ぬ夜の夢となりぬと思ひつゞけ給ふ。

(一)遠江國（靜岡縣）榛原郡。
(二)仲恭天皇の承久三年（一八八一年）。
(三)山城國（京都府）葛野郡嵯峨に在る今の天龍寺。龍頭鷁首

島田、(一)藤枝にかゝりて、岡べの眞葛うら枯れて、もの悲しき夕暮に、(二)宇都の山べを越えゆけば、蔦、楓いと茂りて道もなし。昔業平の中將の、すみ所を求むとて、東の方へ下るとて、「夢にも人にあはぬなりけり。」と詠みたりしも、かくやと思ひ知られたり。

清見潟を過ぎ給へば、都に歸る夢をさへ、通さぬ波の關守に、いとど涙を催され、向ひはいづこ三保が崎、興津、蒲原うち過ぎて、富士の高嶺を見給へば、雪の中より立つ煙、上なき思にくらべつゝ、明くる霞に松見えて、浮島が原を過行けば、潮干や淺き舟浮きて、おりたつ田子のみづからもうき世をめぐる車がへし、竹の下道行惱む、足柄山の峠より、大磯、小磯見おろして、袖にも波はこゆるぎの、いそぐとしもはなけれども、日數積れば七月二十六日の暮ほどに、鎌倉にこそ着き給ひけれ。

——太平記——

(一)駿河國（靜岡縣）志太郡。
(二)「歸りくるほどはなけれど朝露の、岡邊の眞葛うら枯れにけり。」（藤原爲家）
(三)「駿河なる宇津の山べのうつゝにも、夢にも人にあはぬなりけり。」（伊勢物語）
(四)「駒とめて過ぎぞやられぬ清見潟、ちりしく花や波の關守。」（風雅集、法橋顯昭）
(五)「富士の嶺の煙はなほぞ立ちのぼる、上なきものはおもひなりけり。」（新古今集、藤原家隆）
(六)「こゆるぎのいそたちならしい磯菜つむ、めざしぬらすな沖に居れ波。」（古今集、相模歌）
(七)後醍醐天皇の

新葉集の歌〔自修文〕

大町桂月

後醍醐天皇の皇子宗良親王(一)、歌に堪能なり。将軍として戰ふ際にも吟詠を廢し給はず。元弘以來弘和元年までの名歌を撰びて、「新葉和歌集」と題しけるに、長慶天皇これを勅撰(二)に準じ給へり。新葉集はかゝる次第にてできたれば、隨つて吉野山に關する哀なる歌も少からざるなり。

ここにても雲居の櫻咲きにけり
たゞかりそめの宿とおもふに

これ後醍醐天皇の御製なり。吉野の世尊寺に「雲居の櫻」と稱する櫻あり。雲居は禁中をいふ。さらでだに舊禁中のこひしくして堪へ給はざるに、吉野山中「雲居」と稱する櫻を御覽じては、豈叡感無量ならざるを得んや。悲しいかな、かりそめの御やどりつひの御やどりとなりて、延元陵畔、永へに游人をして涙襟を潤ほさしむ。

吉野山花も時得て咲きにけり
みやこのつとに今やかざらん

元弘元年（一九九一年）。

(一)後醍醐天皇の第七皇子。初め出家して尊澄といひ、天台の座主であつた。還俗して宗良と改め、中務卿征東將軍として朝敵征討の軍に從はれた。

元弘云々　後醍醐天皇の元弘元年から長慶天皇の弘和元年まで五十一年間。

(二)醍醐天皇が勅して古今和歌集を撰せしめられてから新續古今集まで勅撰和歌集はすべて二十一ある。

つひの御やどり　最後の御宿。

游人　旅人。

つと　藁などで包んだもの。土産物。

これ後村上天皇(一)の御製なり。山櫻を土産にして京都に還らせ給ひし時の御嬉しさはさぞと思はるれど、やがてまた京都を保ち給ふこと能はずして、再び吉野に赴かせ給ひし時の御失望やいかなりけん。

わが宿と賴まずながら吉野山
花に馴れぬる春もいくとせ

これ長慶天皇の御製なり。後醍醐天皇の皇孫、後村上天皇の皇子、吉野の山中に人となり給ひけん。父祖の御遺志を嗣ぎ給はんの御志切なれども、事終に御志とかなはざりき。されど知らず、京都は果して御心にかなひたる御宿なりしか。この天皇の御母を嘉喜門院(二)と申しまつる。その歌に、

櫻花さきて疾く散る習こそ
わが身の春のもの思なれ

きのふは紅顏、けふは白頭、人生の老いやすきは、男子とても悲歎に堪へざるに、まして女性の御身、櫻花の散りやすきさまを見給ひて、いかに御身をはかなく思し給ひけん。

(一)第九十七代。

花に云々　花となじみになつた春はどれほどであらうか。もはや長い間ここに春を迎へた。

(二)後村上天皇の女御。

雅懐　風流な心持。

(一)長慶天皇の御歌。

そのかみ　その當時の意。ここでは後村上天皇御在世中のこと。峰の松風に往時を思ひだされたのである。

御返し　御返歌のこと。普通歌には返しといひ、文には返りといふ。

(二)長慶天皇。

故里はこひしくとてもみ吉野の
　はなの盛をいかが見すてん

これ新葉集の撰者なる宗良親王の歌なり。詩人の雅懐を見る。されど散らばまたいかに都のこひしかるらん。

嘉喜門院は歌を善くし給ふのみならず、最も琵琶に長じ給へり。されど後村上天皇崩御の後は、悲哀に堪へず、誓つて琵琶を彈き給はざりき。然るに天授三年七月七日、吉野の行宮にて樂を張り給ひけるが、樂終りて後、長慶天皇、門院に向かひて、一曲をと切に乞ひ給ひければ、門院も恩愛の情にほだされて、琵琶を彈き給ふ。その時の御製に、

かくてのみ絶えず聞かばやそのかみの
　秋おもほゆる峰のまつかぜ

昔は父天皇この琵琶を聽きて、御心を慰め給ひけん。父天皇今はおはせず、母君の琵琶が亡き父天皇の形見なり。門院の御返しに

あはれとも君ぞ聽きける今ははや
　ふきたえぬべき峰のまつかぜ

ふきたえぬべき　吹絶えてしまひさうな。

唱和　互に詩や歌で問答すること。

遜色　見劣りしたおもむき。

清貧をあまなふ

「わが餘命いくばくもなし。君が昔をしのぶといふ琵琶の音も、やがて聽き給ふに由なかるべし。」となり。二首いづれも意あはれにして、詞も妙なり。宗良親王これを評して、古の勅撰集中の唱和に比して、毫も遜色なしとて、これを新葉集に收め給へり。

——作文五十講——

七　菊花の約　その一

上田秋成

青々たる春の柳、家園に種うること勿れ。交は輕薄の人と結ぶこと勿れ。楊柳茂り易くとも、秋の初風の吹くに耐へめや。輕薄の人は交り易くして、去るもまた速かなり。楊柳幾たび春に染めども、輕薄の人は絶えて訪らふ日なし。

播磨の國加古の驛に丈部左門といふ博士あり。清貧をあまなひて、友とする書の外は、すべて調度の煩はしきを厭へり。老母あり、孟

起臥も思ふに任せず

母の操に讓らず、常に紡績を事として、左門が志を助けぬ。その季女は同じ里の佐用氏に養はる。この佐用が家は頗る富榮えけるが、丈部母子の賢きを慕ひ、娘を娶りて親族となり、屢、事に託せて物を贈ると雖も、口腹の爲に人を累さんやとて、敢へて受くることなし。

一日左門同じ里の何某が許を訪ひて、いにしへ今の物語して興じける時、壁を隔てて人の苦しむ聲いと哀に聞えければ、主に尋ぬるに、主「西の國の人と見ゆるが、伴に後れしとて、一宿を求められしを、卑しからぬ士と見しまゝ逗めまゐらせしに、その夜邪熱劇しく、起臥も思ふに任せぬがいとほしさに、三日四日を過しぬれど、いづちの人とも定かならぬに、主も思はぬ過し出で、心地惑ひぬ。」といふ。左門聞きて、「悲しき物語にこそ。主の心安からぬもさる事なれど、病苦の人のしるべなき旅の空にこの疾を憂へ給ふは、わきて胸苦しくおはすべし。そのやうをも看ばや。」といふを、主とゞめて、「瘟病は人

死生命あり

漂客

を過つものと聞ゆるものから、家童らにも敢へてかしこに行かしめず。立寄りて身を害し給ふこと勿れ。」左門笑うていふ、「死生命あり、何の病か人に傳はるべき。これ等は愚俗の言にて、吾が輩は取らず。」とて、戸を推して入りつゝその人を見るに、主が語りしに違はで、なみの人にはあらぬが、病深しと見えて、面は黄に、肌は黑く瘦せ、古き衾の上に悶え臥す。人懷かしげに左門を見て、「湯一つ惠み給へ。」といふ。左門近く寄りて、「士憂へ給ふこと勿れ。必ず救ひまゐらすべし。」とて、主と計りて藥を選み、自ら方を案じ、自ら煑て與へ、粥をすゝめて病を看ることなほ同胞の如し。かの武士、左門が情に厚きに涙を流して、「かくまで漂客を惠み給ふ。死すとも御志に報い奉らん。」といふ。左門慰めて、「凡そ疫には日數あり、そのほどを過ぐれば壽命を過たず。吾日々に詣でて仕へまゐらすべし。」と、實やかに契りつゝ、心を用ひて助けけるに、病稍減じて、心地清しく覺えければ、かの士、主にも

(一)出雲國（島根縣）能義郡。今廣瀬町の内。

(二)仁多郡三澤城主三澤氏。城地は今三澤村といふ。

(三)飯石郡三刀屋城主三刀屋氏。城地は今三刀屋、一宮の両村に分れた。

懇に詞をつくし、左門が陰德を尊みて、その生業をも尋ね、己が身の上をも語りていふ、「吾は出雲の國松江の郷に人と成りし赤穴宗右衛門といふものなるが、僅かに兵書の旨を明らめしによりて、富田(一)の城主鹽冶掃部介、吾を師としてもの學び給ひぬ。さても吾、近江の佐々木氏綱へ密使に選ばれて、かの館に逗るうち、前の城主尼子經久、山中黨を語らひて、大晦日の夜不慮に城を乘取りしかば、掃部殿も討死ありしなり。もとより雲州は佐々木の持國にて、鹽冶は守護代なれば、三澤(二)、三刀屋(三)を助けて、經久を亡し給へとすゝむれども、氏綱は外勇にして内怯なる愚將なれば果さず、却りて吾を國に逗む。故なき所に永く居らじと、己が身一つを竊みて還る路にこの疾に罹りて、思ひかけずも師を煩はしけるは、身に餘りたる御恩にこそ。吾半生の命をもて必ず報い奉らん。」左門いふ、「見るところを忍びざるは、人たるものの心なるべければ、厚き詞ををさむるに故なし。なほ逗りていたはり給へ。」といふに、赤穴實ある詞をたよりにて日を經るまゝに、物みな平生に邇くぞなりにける。

左門はよき友得たりとて、日夜交りて物語するに、赤穴も諸子百家のことおろおろ語り出で、とひ辨ふる心愚かならず、終に兄弟の盟をなす。赤穴五歳長じたれば、兄たるべき禮儀ををさめて、左門に向かひていふ、「吾父母に別れまゐらせていと久し。賢弟が老母は即ち吾が母なれば、新たに拜み奉らんことを願ふ。老母憐みて幼き心を受け給はんや。」左門喜に堪へず、「母常に我が孤獨を憂ふ。信ある詞を告げなば、齡も延びなんに。」と伴なひて家に歸る。老母喜び迎へて、「吾が子不才にて學ぶところ時にあはず、青雲のたよりを失ふ。願はくは捨てずして兄たる教を施し給へ。」赤穴拜していふ、「大丈夫は義を重しとす。功名富貴はいふに足らず。吾今母公の慈愛を蒙り、賢弟の敬を受く、何の望かこれに過ぐべき。」と、喜び嬉しみつゝぞ逗りけ

おろおろ

青雲のたより

問はでもしるし

る。

きのふけふ咲きぬると見し尾上の花も散果てて、涼しき風による涙に、問はでもしるき夏の初になりぬ。赤穴、母子に向かひて、「吾近江を遁れ來りしも、雲州の動靜を見ん爲なれば、一たび下りてやがて歸り來り、御恩を返し奉るべし。今の別を賜へ。」といふ。左門いふ、「さあらば兄長いつの時にか歸り給ふべき。」赤穴いふ、「月日は逝き易し。遲くともこの秋は過さじ。」左門いふ、「秋はいつの日を定めて待つべき。願はくは約し給へ。」赤穴いふ、「重陽の佳節をもて歸りくる日とすべし。」左門いふ、「兄長必ずこの日を誤り給ふな。一枝の菊花に薄き酒を備へて待ち奉らん。」と、互に情をつくして、赤穴は西に歸りけり。

八　菊花の約　その二

あら玉の月日は疾く經ゆきて、下枝の茱萸色づき、垣根の野ら菊

八雲たつ國

人の心の秋

にほやかに、九月にもなりぬ。九日はいつよりも早く起出でて、草の屋の席を拂ひ、黃菊白菊二枝三枝小瓶に挿し、囊をかたぶけて酒飯の設す。老母いふ、「かの八雲たつ國は山陰の果にありて、ここへは百里を隔つと聞く。けふとも定め難きに、その來しを見てものすとも遲からじ。」左門いふ、「赤穴は信ある武士なれば、必ず約を誤らじ。その人を見てあわたゞしからんは、思はんことの耻づかし。」とて、美酒を買ひ、鮮魚を煮て厨に備ふ。

午時も稍傾きぬれど、待ちつる人は來らず。西に沈む日に宿り急ぐ足のせはしげなるを見るにも、外の方のみまもられて、心醉へるが如し。老母、左門を呼びて、「人の心の秋にはあらずとも、菊の色濃きはけふのみかは。歸りくる信だにあらば、空は時雨に移り行くとも何をか怨むべき。入りて臥しもして、またあすの日を待つべし。」とあるに否み難く、母をすかして前に臥さしめ、若しやと戸の外に出で

氷輪

て見れば、銀河影消え消えに、氷輪我のみを照らして寂しきに、軒守る犬の吼ゆる聲澄みわたり、浦波の音ぞここもとにたちくるやうなる。月の光も山の端に暗くなれば、今はとて戸をたてて入らんとするに、たゞ看る、朧なる黒影の中に人ありて、風のまにまにくるを怪しと見れば、赤穴宗右衛門なり。躍りあがる心地して、「小弟早くより待ちて今に至りぬ。盟違へで來り給ふことの嬉しさよ。いざ入らせ給へ。」といへど、うなづくのみにて物をもいはず。左門進みて南の窓の下に迎へ、座につかしめ、「兄長來り給ふことの遲かりしに、老母も待ちわびて、あすこそと臥所に入らせ給ふ。寤させまゐらせん。」といふに、赤穴また頭を振りてとゞめつゝ、更にものをもいはず。左門いふ、「すでに夜をつぎて來給ふに、心も倦み、足も疲れ給ひつらん。幸に一杯を酌みてやすませ給へ。」とて、酒を煖め、下物を列ねてすゝむるに、赤穴袖をもて面を掩ひその臭を忌みさくるに似たり。左門い

井臼の力

腹心爪牙

ふ、「井臼の力はた、もてなすに足らざれども、己が心なり。いやしみ給ふこと勿れ。」赤穴なほ答もせで、長き息をつきつゝ、しばししていふ、「賢弟が信ある饗應をなど否むべき理あらん。欺くに詞なければ、實をもて告ぐるなり。必ず怪しみ給ひそ。吾は現世の人にあらず、きたなき靈の、假に形を見せつるなり。」左門大いに驚きて、「兄長何故にこの怪しきこと語り出で給ふや。更に夢とも覺えはべらず。」赤穴いふ、「賢弟と別れて國に下りしが、國人大かた經久が勢につきて、鹽冶の恩を顧るものなし。從弟赤穴丹治の富田の城にあるを訪らひしに、利害を說きて吾を經久に見えしむ。熟〻經久が爲すところを見るに、萬夫の雄人に勝れ、能く士卒を訓練すと雖も、智を用ふるに狐疑の心多くして、腹心爪牙の家の子なし。永く居りて益なきを思ひて、賢弟が菊花の約あることを語りて去らんとすれば、經久怨める色ありて、丹治に令し、吾を大城の外に放たずして、遂に今日に至らしむ。

この約に違ふものならば、賢弟吾を何ものとかせんと、ひたすら思ひ沈めども、遁るゝに方なし。古の人もいふ、『人一日に千里を行くこと能はず、魂能く一日に千里をも行く。』と。この理を思ひ出でて、自ら及に伏し、今夜陰風に乘りて遙々來り、菊花の約につく。この心を憐み給へ。」といひ終りて、涙湧出づるが如し。「今は永き別なり。たゞ母公に能く仕へ給へ。」とて、座を起つと見しが、かき消す如く見えずなりにけり。左門あわててとゞめんとすれば、陰風に眼眩みて行方を知らず。俯伏につまづき倒れたるまゝに、聲を放ちて大いに哭く。老母目ざめ、驚き立ちて左門がある所を見れば、座上に酒瓶、魚盛りたる皿どもあまた列べたるが中に伏倒れたるを、いそがはしく扶け起して、「いかに。」と問へども、たゞ聲を呑みて泣く泣く更に詞なし。老母問うていふ、「赤穴が約に違ふを怨むとならば、あす若し來らば詞なからんものを。」と強く諫むるに、左門漸く答へていふ、「兄長今夜菊花

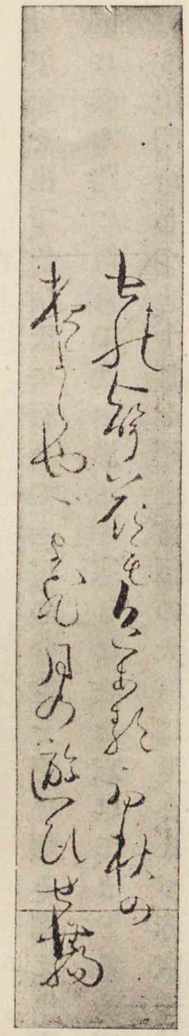
漿水

蟲の聲花も色ある初秋の夜よしやこよひ月の遊ひせん。　無腸

まさなし

身を翰墨によす

の約に來る。酒肴をもて迎ふるに、再三辭み給うていふ、しかじかの事にて約に背くが故に、自ら及に伏して陰魂百里をくるといひて、見えずなりぬ。それ故にこそは母の眠をも驚かし奉れ。たゞたゞ赦し給へ。」と潸然と泣入るを、老母いふ、「牢裏に繫がるゝ人は夢にも赦さるゝを見、渴する者は夢に漿水を飲むといへり。汝もまたさる類



上田秋成筆蹟

にやあらん。能く心を鎭むべし。」とあれども、左門頭を振りて、「信に夢のまさなきにあらず、兄長はここもとにこそありつれ。」と、また聲をあげて泣倒る。老母も今は疑はず、相よびてその夜は泣明かしぬ。

翌日左門母を拜していふ、「吾幼より身を翰墨によすと雖も、國に忠義の聞えなく、家に孝信をつくさず、徒に天地の間に居る。兄長赤

けふを久しき日

生は浮きたる泡の如く旦に夕べを定め難し

穴は一生を信義の爲に終ふ。小弟けふより出雲に下り、せめては骨を藏めて信を全うせん。尊體を保ち給うて、暫くの暇を賜ふべし。」老母いふ、「吾が兒かしこに去るとも、早く歸りて老が心を休めよ。永く逗りて、けふを久しき日となすこと勿れ。」左門いふ、「生は浮きたる泡の如く、旦に夕べを定め難くとも、やがて歸り參るべし。」とて、涙を振うて家を出で、佐用氏に行きて、老母の介抱を懇に賴み聞え、出雲の國に參る路に、飢ゑて食を思はず、寒きに衣を忘れて、まどろめば夢にも泣明かしつゝ、十日を經て富田の大城に至り、まづ赤穴丹治が家に行く。丹治迎へ請じて、「翼あるものの告ぐるにあらで、いかに知らせ給ふべき謂れなし。」と頻りに問ひもとむ。左門いふ、「士たるものは富貴消息の事ともに論ずべからず、たゞ信義をもて重しとす。兄長宗右衛門一旦の約を重んじ、空しき魂の百里を來るに報すとて、日夜を逐うてここに下りしなり。吾が學ぶところについて士に尋

社稷

(一)支那秦の政治家。法治を以て秦を富強にした。

ねまゐらすべき旨あり。願はくは明らかに答へ給へかし。昔魏の公叔座病の牀に臥したるに、魏王自ら詣でて、手を執りつゝ告げけるは、『若し忌むべきことあらば、何人をして社稷を守らしめんや。吾が爲に教を遺せ。』とあるに、叔座いふ、『(一)商鞅年少しと雖も奇才あり。王若しこの人を用ひ給はずば、これを殺しても境を出すこと勿れ。他の國に行かしめば、必ず後の禍となるべし。』と懇に教へて、また商鞅を私に招き、『吾汝を勸むれど王許さゞる色あれば、用ひずば却りて汝を害し給へと教ふ。これ君を先にし、臣を後にするなり。汝早く他の國に去りて害を免るべし。』といへり。この事、士と宗右衛門とに比べてはいかに。」丹治たゞ頭を低れて詞なし。左門座を進みて、「兄長宗右衛門、鹽治が舊交を想ひて尼子に仕へざるは義士なり。士が舊主の鹽治を捨てて尼子に降りしは士たる義なし。兄長が菊花の約を重んじ、命を捨てて百里を來しは信ある限りなり。士が今尼子に媚び

横死

て骨肉の人を苦しめ、この横死をなさしめしは友とする信なし。經久強ひてとゞめ給ふとも、久しき交を思はば、私に商鞅、叔座が信をつくすべきに、たゞ榮利にのみ走りて士家の風なきは、即ち尼子の家風なるべし。吾今信義を重んじて、わざわざここに來る。汝はまた不義の爲に汚名を遺せ。」とて、いひも終らず抜打に斬りつくれば、一刀にてそこに倒る。家眷ども立騒ぐ間に、早く逃れ出でて跡なし。尼子經久このよしを傳へ聞きて、兄弟信義の篤きを憐み、左門が跡を

家眷

猜忌

も強ひて追はせざりきとなり。あゝ、輕薄の人と交は結ぶべからずとなん。

——雨月物語——

九　友道

綱島梁川

友道に最も忌むものは猜忌なり。嫉妬なり。蓋し友は多くは自己と主義、理想、好尚、信仰を同じうするもの、而してその知識、才能に於

(一)支那齊の賢相管夷吾。
(二)齊の賢相鮑叔牙。管仲と互に知己の友。

肺肝を披瀝す

ても、甚だしき懸隔なきを常とす。げに友は第二の我なり。隨つて起り易きものは嫉妬なり。しかも一たび嫉妬の情生ぜんか、最早貴き友情を味はふ資格なきものと墮せるなり。

我を最もよく知るは友なり。我等は一切の自家秘密をうち明け得るものを得て、始めて解脱し超我す。人は知音の爲には身命をも獻げて辭せざらんとするもの。而して此の如き知音は友あるのみ。管仲(一)、鮑叔(二)の事以て徵すべし。故に自己の弱點、秘密をうち明け得ざるものは、眞の友を得る能はず。眞我をうち出し、肺肝を披瀝して相照らすものにあらざれば、友ある能はず。友を得る第一要件は、公明に我をうち明くる勇氣なり。自ら缺陷、弱所を掩ひ包み、恰も栗のいがの如く、ひしと護身の劒戟に身繕ひして、さて友と交るものあり。此の如くして友を得んこと難いかな。

自家の短所を暴露するは友に交る一要件なりと雖も、こは他の

提撕す

切磋す

金蘭の友

最大要件と相須ちての自然の果たるを要す。眞善美の理想に向上せんとする熱情に相合し、この美しき意義に相許して、自他提撕して勇猛精進する一事これなり。この高上なる結合ありて、始めて互にその弱點、短所をうち明け合うて、相同情し相切磋して進むを得べく、その醜所、暗所は高上なる理想の光もて和げられ、言難き向上の涙もて温めらるる。かゝる友道に於ては、自他その短所、弱所を知ることが、却つて同情發憤の動力となるなり。

今の世には、何ぞ熱情をもて友を求むるものの少き。世は澆漓、儇薄の流に漂ひて、かゝる美しき熱情をも失へるか。嗚呼、友は人生最高の無價寶なり。花の前、月の下に假初に結べる友垣だに嬉しきものなるを、金蘭の友のいかばかり貴きぞ。人は子孫に生き、または事業に生くといふ。されど眞に生くるは友のみ。眞の我はたゞ友の中にありて生き、榮え、光輝を放つ。

(一) John Stuard Mill. イギリスの哲學者、經濟學者。(西暦一八〇六年―一八七三年)

嘗て我が友に、病を得て瞑せんとするに臨み、「我が志を成すものは君なり。我は君によりて生くべし。君それ自愛せよ。」との一語を遺して逝きしものあり。今は憶ひ出づるだに切々の情に堪へず。友の眞義を教へたるもの實にこの一語なりと、我は常に思ふなり。道の友、理想の友のみ眞友なり。されば(一)ミルが「善人を外にして眞心より自由を愛するものなし。」といひし如く、吾人は「善人を外にしては眞心より友を愛するものなし。」といはんとす。惡人は眞の我即ち理想を有せず、隨つて眞の友あることなし。自家心中に道を有するもの、眞善美の理想を有するものにして、始めてよく友道の大義をつくすべし。同じ理想の佛前に跪禮するものにして、同氣同聲相呼應感孚するを得べきなり。されば嗜好、職業、地位、階級を同じうし、または利益快樂を同じうするのみにては、友道は決して成るべきにあらず。友道は倫理道德を根柢とす。友を得る道豈容易ならんや。

(一)京都府（丹後國）竹野郡。所謂浦島子の故郷。

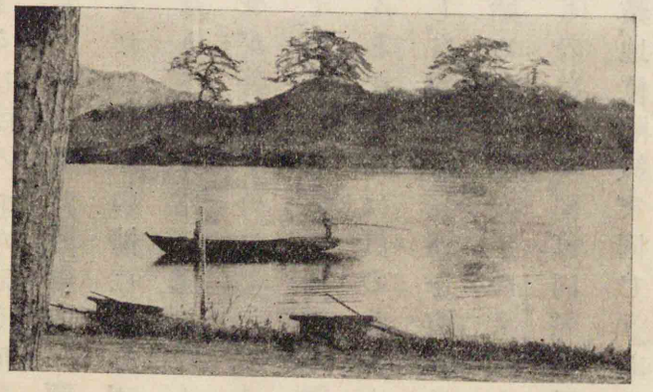
(二)「渤海之東。不レ知ニ幾億萬里。有ニ大壑ニ焉。實惟無底之谷。其下無レ底。名曰ニ歸墟。八紘九野之水。天漢之流。莫レ不レ注レ之。而無レ増無レ減焉。」（列子）

(三)列子。名は禦寇

一〇　澄の江の浦

坪内逍遙

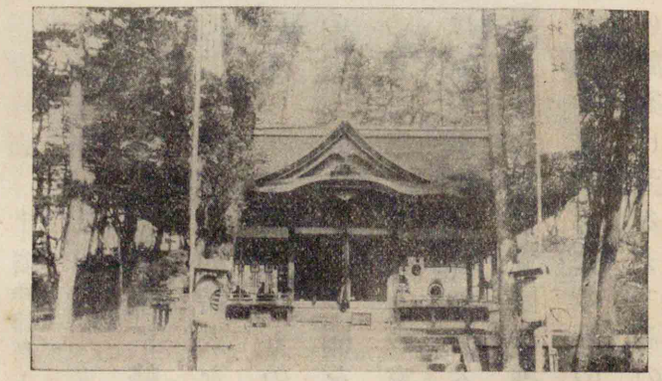
それ渤海の東方に、
底ひ知れざる壑あるを、
名づけて歸墟といふとかや。
八紘九野の水つくし、
空に溢るゝ天の河、
ながれの限り注げども、
無増無減と唐土の、
至人が寓言今ここに、
見る目はるけきわたの原。
北を望めば蒼茫と、



澄の江（丹後網野）

(一)蓬萊の島。「渤海之東有ニ五山。岱輿、員嶠、方壺、瀛洲、蓬萊也。」（列子）

八重の潮路は霞こめ、
蓬が島にや通ふらん。
西を見やれば千里の波、
浩蕩としてきはまりなく、
旦に洗ふ高麗の岸、
夕陽もぞこに夜の殿。
錦繡の帳暮れゆけば、
むらさき匂ふ空の色、
なにに驚く早紅葉の、
頻りに墜ちてやする山、
秋老けぬれば欸乃を、
絡りて渡る雁が音に、



浦島神社（丹後網野）

氣も澄の江の浦の波、
幾代の調や疊むらん。

—新曲浦島—

一一　詩人杜甫

德富蘇峰

杜甫は君國的詩人と稱すべきと同時に、また家庭的詩人なりといふを得べし。彼の全集には、事の國家、帝王、時事に關するもの最も多く、これに次いでは家族に關するもの多し。人未だその國を愛して、その家を愛せざるものなく、未だその君に忠にして、その家族に無情なるものあらず。彼の眼中には、國は家の擴大せられたるものにして、家は國の縮小せられたるものなり。彼の忠君愛國は抽象的にあらずして、その妻子弟妹を愛するの情を推及したるものなりき。支那の詩人、上は詩經より、下は明清の諸家に至るまで、その家に多少の詩思を接觸せざるものあらず。されど支那の全史を通じて、未だ彼の如き家庭的詩人を見出す能はざるなり。その「進艇」の作を看よ。

南京久客耕南畝。北望傷神坐北牕。晝引老妻乘小艇。
晴看稚子浴清江。
俱飛蛺蝶元相逐。
並蒂芙蓉本自雙。
茗飲蔗漿携所便。
瓷罌無謝玉爲缸。

杜甫（寺崎廣業筆）

これ成都に於ける浣[二]花草堂生活中の消息なり。その一家和樂の狀は、千載の下なほ活躍す。夫婦小艇に乘じ、稚子清江に浴す。艇上の蛺蝶は俱に飛び、水邊の芙蓉は蒂を並ぶ。先生貧なりと雖も、その樂み決して貧ならざるなり。人類ありて以來、詩人多からずとせず。しかも彼が如き清福を贏

(一)支那四川省の首府。
(二)西都の西五里なる浣花溪（一名百花潭）に在つた杜甫の故宅の名。

ト居

得たるもの、それ幾許かある。その江村卜居の作中句あり。いはく、「老妻畫紙爲基局。稚子敲針作釣鉤。」と。貧家の活計も、ここに至りて寧ろ羨むべきを見るなり。若しそれ彼が「春望」の五律の如き、

國破山河在。城春草木深。感時花濺淚。恨別鳥驚心。
烽火連三月。家書抵萬金。白頭搔更短。渾欲不勝簪。

いかなる鐵石の心腸を有するものも、誦し來りて黯然たらざるはあらじ。詩としても絶調なり。情としても絶調なり。「家書抵萬金。」の一句は、眞に彼の胸奥より湧出でたるなり。同時に「遣興」の詩あり。

驥子好男兒。前年學語時。問知人客姓。誦得老夫詩。
世亂憐渠小。家貧仰母慈。鹿門携不遂。雁足繫難期。
天地軍麾滿。山河戰角悲。倘歸免相失。見日敢辭遲。

(一)杜甫の末子宗武。

彼の心は實にこの稚兒に惓々たりしなり。また「元日示宗武」の作にいはく、

惓々

汝啼吾手戰。吾笑汝身長。處處逢正月。迢迢滯遠方。
飄零還柏酒。衰病只藜床。訓諭青衿子。名慙白首郎。
賦詩猶落筆。獻壽更稱觴。不見江東弟。高歌淚數行。

(一)唐の肅宗の代の年號。凡そ千百七十餘年前。
(二)肅宗の次、代宗の代の年號。

前詩は至德二載の春、即ち彼が四十五歲の作、後詩は大曆三年の正月元日、即ち彼が五十七歲の作なり。僅かに父の詩を誦するを學ぶ驥子も、今は一個の青年となりぬ。吾人はこれを讀んで、いかに彼がその子に愛着したるかを知るなり。而してまたその同胞に眷々たるかを知るなり。

彼の愛はその妻子のみならず、實に弟妹に及べり。彼の「同谷縣七歌」中の第三首と第四首とは、弟と妹とを題目とせり。「有弟有弟在遠方。三人各瘦何人强。」と。またいはく、「有妹有妹在鍾離。良人早沒諸孤癡。」と。その他集中に散見する彼が同胞を懷ふの詩、枚擧に遑あらず。彼や眞に家庭的、若しくは家族的詩人たるに愧ぢざるなり。

（一）法成寺。寛仁三年（一六七九年）道長の創建。址は今の京都御所の東隣。
（二）藤原頼通。道長の子。世に宇治殿といふ。承保元年（一七四年）薨、年八十三。
（三）藤原道長。

一二　法成寺の造營

――杜甫と彌耳敦――

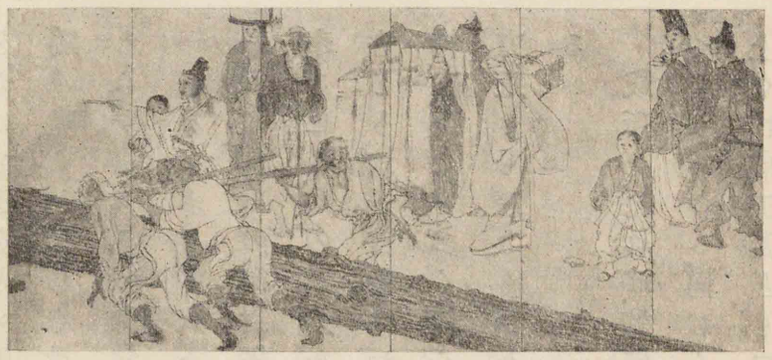
今は御心地例ざまになりはてさせ給ひぬれば、御堂のこと思し急がせ給ふ。攝政殿、國々までさるべき公事をばさるものにて、まづこの御堂のことを先につかうまつるべき仰言宣ふ。殿の御前も、「このたび生きたるは別事ならず、我が願のかなふべきなめり。」と宣はせて、他事なくたゞ御堂におはします。方四町をこめて大垣にして、瓦葺きたり。さまざまに思しおきて急がせ給へば、夜の明くるも心もとなく、日の暮るゝも口惜しう思されて、夜もすがらは、山をたゝむべきやう、池を掘るべきさま、木を栽ゑなめさせ、さるべき御堂御堂、方々さまざま造りつゞけ、御佛はなべてのさまにやはおはします。丈六の金色の佛を、數も知らず造りなめ、そなたをば北南と馬道

御封
御庄
地子
官物

をあけて、道をとゝのへ造らせ給ひて、廊、渡殿數多く造らせ給ふに、鷄の鳴くも久しく思され、宵、曉の御行も怠らず、安きいも大とのごもらず、たゞこの御堂のことのみ深く御心にしませ給へり。

日々に多くの人々參り罷で立ちこむ。さるべき殿ばらをはじめ奉りて、宮々の御封、御庄どもより、一日に五六百人千人の夫どもを奉るにも、人の數多かることをば、かしこきことに思したち、國々の守ども、地子官物はおそなはれども、たゞ今はこの御堂の夫役、材木、檜皮、瓦など多く參らすることを、我も我もと競ひつかうまつる。大方近きも遠きも參りこみて、品々方々、あたりあたりにつかうまつる。

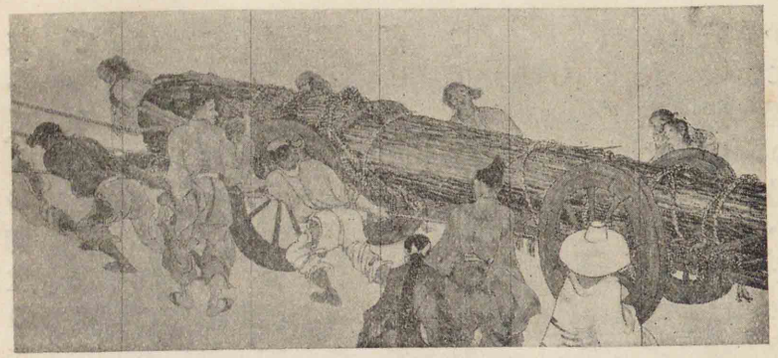
或所を見れば、御佛つかうまつるとて、佛師ども百人許並みゐてつかうまつる。同じくは、これこそめでたけれと見ゆ。御堂の上を見上ぐれば、工匠（たくみ）ども二三百人のぼりゐて、大きなる木どもには太き



棟木（尾竹竹坡筆）その一

綱をつけて、聲を合はせて、えさまさと引上げさわぐ。御堂の中を見れば、佛の御座作りかゞやかす。板敷を見れば、とくさ、むくの葉などして、四五十人手毎に並みゐて磨き拭ふ。檜皮葺、壁塗、瓦作なども數をつくしたり。

また年老いたる翁などの、三尺許の石を、心に任せて切りとゝのふるもあり。池を掘るとて四五百人おりたち、山を疊むとて五六百人のぼりたち、また大路の方を見れば、力車に、えもいはぬ大木どもに綱をつけて、叫びのゝしり引きもてのぼるあり。賀茂川の方を見れば、いかだといふものに、くれ、材木を入れて、棹さして心地よげに謠ひのゝし



棟木（尾竹竹坡筆）その二

りてもてのぼるめり。磐石といふばかりの石を、はかなきいかだに載せて率てくれど沈まず。すべていろいろさまざま、いひつくし、まねびやるべき方なし。かの須達長者の祇園精舍造りけんも、かくやありけんと見ゆるを、冬の室、夏の風、各ことごとなり。

かゝる御勢にそへて、入道せさせ給ひて後は、いとど勝らせ給へりと見えさせ給ふにも、なほなべてならざりける御有樣かなと、近う見奉る人は尊み、遠う見奉る人は、遙かに拜みまゐらす。今はこの御堂のあたりの木草ともならんと思へる人のみ多かり。そなたざまに赴けば、海の浪もやはらかに

(一)釋迦在世時代の富豪。蘇達多ともいふ。

たちて、この御堂のものをもて運ばせ、河も水澄みて、快く浮かべもて參ると見ゆ。なほなべてこの世のこととは見えさせ給はず。まづは、先年に長谷寺(一)にある僧の、御祈禱をいみじうして寢たりける夢に、大きにいかめしき男の出で來て、「何かかく殿の御事をばともかくも申し給ふ。弘法大師の佛法興隆の爲に生まれ給へるなり。」とぞ見えさせ給ひける。また天王寺の聖德太子の御日記には、「王城より東に、佛法弘めん人を我と知れ。」とこそは書置かせ給ふなれ。いづれにても、おろかならぬ御事なり。

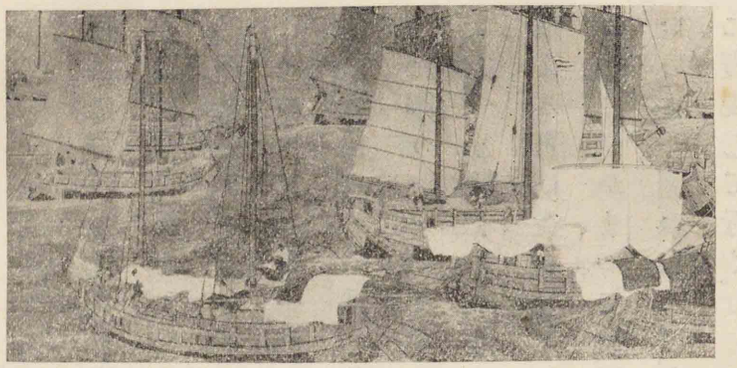
——榮華物語——

(一)眞言宗豐山派の本山。大和國(奈良縣)磯城郡初瀬に在る。

一三　人間の價値

和辻哲郎

人生は戰である。そして戰の大小深淺が人間の價値を左右する。戰の態度の統一は複雜な內生によりも、單純な迷のない生活に遙かに起り易い。それ故、たゞ純一の故を以て意を安めてはならぬ。純



帆船（伊藤溪水筆）

一の態度に固執するものは、ともすれば內容を空疎にしがちである。

私は、或冬の日、紺青鮮かな海の邊に立つた。帆を張つた二三十艘の小舟が群をなして冲から歸つてくる。そして鳩が地へ舞下りるやうに、徐々に一艘づつ帆を下して、半町程の冲に屯した。濱邊との間には大きな白い磯波が捲返してゐる。いつの間にか老人や、子供や、女房たちが、濱邊に群り立つた。やがて體格の立派な若者のそろつて乘つた舟が、冲合から突進んでくる。磯波は烈しく押戻す。磯から綱が投げられる。若者が波の間へ飛びこん

で行く。舟は木の葉のやうに揉まれてゐる。綱が確實に舟に結びつけられる。若者は舟の傍木へ肩を掛ける。陸からは、綱を引くものが諸聲に力のリズムを響かせる。かくて波を蹴散らし、足をそろへ、聲を合はせて、舟を砂の上に引きずり上げて行く。

一艘あがるとともに、舟にゐた若者たちは、直ちに綱を取つて海に向かつた。次の一艘が磯波に乘りかゝると、ちやうど荒廻る牛の角に投掛けるやうに、若者は舟へ綱を投掛ける。そして他の若者たちは躍りかゝつて、肩をあてて一氣に舟を引上げる。かうして次から次へと數十艘の舟が陸へ上げられるのである。陸上の人數は益殖える。舟は益、おもしろさうに上つてくる。老人や、子供や、女房たちは、綱につかまつて快活に跳ねてゐる。誰が命令するといふでもないのに、一團の人々は、有機體のやうに協力と分業とで仕事を完全に實現して行く。

私は息を詰めてこの光景を見守つた。海の力と戰ふ人間の姿。集中と純一とが最も具體的な形に現れてゐる力の充實、隙間のない活動。一人の少年が両手を高く擧げつゝ波の中に躍りこんで行く。首だけ出して、波に弄ばれてゐる板切に追ひすがる。やがて板切を抱いて、水を跳飛ばしながら馳上つてくる。生命が躍り跳ねてゐるのだ。生命が自然と戰ひ、それを征服してゐるのだ。私は、そこに現れた集中と純一と全存在的な活動との爲に、暫し恍惚とした。

この氣持の好さは、我々がすべての活動に追求してゐるところの一種の法悦であつた。我々の内にもまた、生命の焰はかく燃上らなくてはいけない。まことにそれは生命本來の姿であり、また生命本來の歡喜である。

かうして漁師の群の活動を眺めてゐる間に、私はふと傍觀者の手持無沙汰を感じだした。私は漁師の群に投じて共に働くか、でな

ければ、傍觀者としての自己の立場を是認するか、いづれかに道を決めなければならなくなつた。さうして私の頭には、百姓と共に枯草を刈るトルストイの面影と、地獄の扉を見下して坐してゐる考へる人」の姿とが、相並んで浮かび出た。私は石の上に腰をおろし、足を重ねて、右の肱を左の膝に突いて、顎を手の甲に載せて、そして考に沈んだ。殘つた舟はもう二三艘になつてゐた。

トルストイ

私は思つた、漁師の群に貴い集中と純一とを認めたのは、私の心に過ぎなかつたではないか。彼等は今や濱から家へ歸る。そこにはもう貴さは見えない。彼等は波と戰つて勇ましくうち克つたが、敵手が人間になり、更に自分の心になると、彼等はもう立派な戰士ではない。彼等の活動は眞正の面影を暗示するが、それは彼等自身の全生活ではなかつた。彼等は低い力と戰つてゐる時にのみ強いのであつた。

(一)フランスの彫刻家ロダンの作。

私は複雜な深さの知れぬ人生のいろいろな力を思つた。そして集中と純一との缺けてゐる悲慘な醜さを心に浮かべた。そこにある苦しい戰は、裸になつて冬の海に飛びこむことによつては解決されさうにもなかつた。私はたゞ自分自身の力で自分の內生にあの集中と純一とを獲得する外はない。その爲に私はあらゆる方面に終局まで戰はなくてはならぬ。勝利を得るまでの分裂した生活の悲慘さは、目下の自分の力では如何ともし難い。

ロダン作「考へる人」

私は一つのことを悟り得た。迷と屈託とに遲滯してゐるの故を以て、直ちにその人の人格を卑しめてはならぬ。態度の純一、それは

實に價値あることではあるが、單にその故を以て直ちにその人の人格を過大視してはいけない。態度の美しさの外に、なほ一つ、戰の深さによつて人を見る視點があるからである。　―偶像再興―

一四　萬葉集の歌

今田禮吾

(一)天武天皇。
(二)鎌足。

(一)天皇詔(二)内大臣藤原朝臣競憐春山萬花之艶、秋山千葉之彩時、額田王以歌判之歌

冬ごもり、　春さりくれば、　なかざりし鳥も來鳴きぬ、
さかざりし花も咲けれど、　山をしみ入りても聽かず。
草深みとりても見ず。　秋山の木の葉を見ては、　もみぢをば取りてぞしぬぶ。　青きをば置きてぞ歎く。　そこし恨めし秋山われは。

吉野宮に幸ませる時　柿本人麿

安見ししわが大君、　神ながら神さびせすと、　吉野川瀧つ河内に、　高殿を高知りまして、　上り立ち國見をすれば、　たゝなはる青垣山の、　山神の奉る御調と、　春べは花かざし持ち、　秋立てば紅葉かざせり。　夕川の神も、大御食に仕へまつると、　上つ瀨に鵜川を立て、　下つ瀨に小網さしわたし、　山川もよりて仕ふる神の御代かも。

反歌

山川もよりてつかふる神ながら
たぎつ河内に船出せすかも

望不盡山歌　(一)山部赤人

天地のわかれし時ゆ、　神さびて高く貴き、　駿河なる富士の高嶺を、　天の原ふりさけ見れば、　わたる日の影もかくろひ、　照る月の光も見えず、　白雲もい行きはゞか

安見ししわが大君
國見

(一)奈良時代の歌人。人麿と並び稱せられる。

り、時じくぞ雪はふりける。　語りつぎいひつぎ行かん、富士の高嶺は。

反歌

田子の浦ゆうち出でて見れば眞白にぞ
ふじの高嶺に雪はふりける

山上憶良[一]

思子等歌

瓜はめば子ども思ほゆ。栗はめばましてしのばゆ。いづくより來りしものぞ、まなかひにもとなかゝりて、安寢しなさぬ。

反歌

白金も黃金も玉もなにせんに
まされる寶子にしかめやも

柿本人麿

(一)奈良時代の歌人。天平五年(一三九三年)歿、年七十四。

あしびきの山河の瀨の鳴るなべに
ゆづきが嶽に雲たちわたる

笠金村[一]

ものゝふの臣の男子は大君の
まけのまにまに聞くといふものぞ

志貴皇子[二]

いはばしるたるみの上のさわらびの
もえいづる春になりにけるかも

大伴家持[三]

ますらをは名をし立つべし後の世に
聞きつぐ人もかたりつぐがね

(一)奈良時代の歌人。
(二)天智天皇の皇子。
(三)奈良時代の武將で歌人。延曆三年(一四四四年)歿。

緊張の頂點　一番隙のない程度。
傳統的に　血筋を傳へるやうに。次から次へと代を逐うて。
民衆心理　主として中流以下の多數世人の中に、培はれた心持。
空疎　とぼしいこと。
萎縮　なえちゞむこと。
勅撰集時代　醍醐天皇の時勅して古今和歌集を撰せしめられた頃から、後花園天皇の新續古今集で勅撰集の終るその間をいふ。五百三十餘年間。

民謠の話〔自修文〕

島木赤彦

日本民族には、太古から日常の感情を歌謠にうつして、自ら口に歌ひ、且つまた對者と唱和するといふ風があつた。それ等の民謠の中で、或特別な形式を備へたものは、移つて短歌となつて、かの萬葉集時代に於ける大發達をなした。然るにこの萬葉集時代に緊張の頂點にまで達した短歌が、古今集以後の勅撰集に至つて、著しく弛緩の狀態を現したといふことは、一面奇異な現象のやうに考へられるが、それは決して奇異ではないのである。

古今集以後の和歌といふものは、萬葉集の歌の如く、傳統的に民衆心理から生みだされた歌ではない。民衆とかけ離れた一部貴族社會の玩物であつて、そのでき方も、緊張した感情から生みだされるといふよりも、外形を整へるに苦心して作りだされたもので、內面の空疎と萎縮とは、當時の歌人の思はぬところであつた。故に私は、萬葉集の精神は決して勅撰集には傳はらずに、却つて短歌の形を存してゐないその當時の民謠に存してゐると信じてゐる。民衆の心理から生まれた短歌の精神が、民族的歌謠の一分流であるところの民謠に合流

神樂歌　神樂に和して歌ふ歌。
催馬樂　雅樂の一。初め奈良時代の民謠で馬方の歌つたものであるが、平安朝以後歌曲としたのである。
しながどり　(息長鳥)かいつぶりのこと。猪名の枕詞。
(一)遠江國(靜岡縣)濱名郡西濱名村の邊。
若草の妹の枕詞。
惻々　心のかなしみいたむさま。

してゐるといふことは、決して不自然ではない。

この事は、勅撰集時代の、その背後に存してゐたと思はれる神樂歌や、催馬樂などの中に現れてゐる民謠を檢べて見れば、容易にうなづくことができるのである。

笹分けば袖こそ破れめ利根川の、石は踏むともいざ河原より。

しながどり猪名(一)の湊に入る舟の、かぢよくまかせ、舟かたぶくな、

若草の妹も乘りたり、我も乘りたり。

といふやうなのは、ほんの一例に過ぎぬが、この民謠から採つたと思はれる神樂歌や催馬樂歌を以つて、古今集以下の勅撰集に比べても、その系統が萬葉集に通じてゐることは明白である。そしてこの民謠の系統は、足利、德川の各時代を經て、順次に發達推移して、今日に及んでゐるのである。

然らばそれ等の民謠の生命となつてゐるのは何であらうか。それはやはり、民衆の苦しい生活が自然に產みだした、惻々として人の心を動かす力をもつ情調である。農民の唄ふ歌謠には、のん氣に似て、その底には重々しい調子が籠

つてゐるし、船頭唄や馬子唄には、多くは漂泊の遣瀬ない哀音が籠つてゐる。

乳(一)が崎沖まぢや見送りましよが、それから先は神だのみ。（伊豆大島）

の唄の如き、必ずしも船唄とばかりはいへぬが、海中の孤島に頼りなく住む人人の心理が、「神だのみ」の哀音となつて現れてゐる純粋さを味はふべきである。

碓氷の初冬（中野營三筆）

淺間の煙が北へと靡く、
今宵泊らにや雨になる。

一誦して淺間の山裾から碓氷越をして、北國街道を往來する馬子の唄であることがわかるではないか。淺間の裾野には追分(二)の宿場があり、碓氷峠の下には坂本(三)の宿驛があつて、いづれも中仙道(四)の旅人の一夜の泊場であつた。そこの宿引の女が旅人を呼びとめて、一宿を勧める心がこの歌の心である。一夜の宿を勧める歌謠を、

(一)大島の西北端。
(二)長野縣北佐久郡にある町。もと中仙道と善光寺道との分岐點であつた。
(三)群馬縣碓氷郡にある町。碓氷峠の東麓。
(四)東山道を經て江戸から京都へ行く街道。

淺間山
（中野覺藏筆）

情調心持。

勸められる旅人や馬子が自ら唄つて、自分の境遇を辛うじて慰めてゐるところが、哀な漂泊の心である。年が年中、馬の鈴を鳴らして、上るは碓氷の坂、下るは輕井澤、追分の曠野である。見上げる空にはいつも淺間の山の煙が靡いてゐる。煙は多く南へ靡く。風が北になれば日は晴れる。煙が北へ靡けば、あすの日和は雨となる。「今宵泊らにや雨になる。」は、この嶮坂を上下する脚絆草鞋の身には、決して戯れの問題ではないのである。

麥ついて、夜麥ついて、お手にまめが九つ。九つのまめを見れば、
親里がこひしや。

麥をつくは農家の新婦である。嫁して幾ばくならず、家人の心も知り難く、起臥にいとど落着かぬ心がある。父母の愛娘として、掌中の玉であつた優しい身も、今は夜麥をつく。夜麥をついて掌にできたまめを眺めて、親里を思ふ心の痛切さは、恐らく人麿、貫之の秀歌にも勝るものがあらう。

これ等の唄は、その生活から唄はれてゐる。その職業や境遇の生む情調が叙べられてゐる。そしてその民謡としての生命も、全くその中にあるのである。

かゝる職業的個性の心理や感情を現す民謠ほど、それがまた地方的の個性を表現してゐるといひ得る場合が多いやうである。土を離れて人なく、人の個性は少くとも土の個性を離れることはできない。その土地のもつ情調が、その土に住む生活から唄はれた民謠に強い影を投ずることは、誠に自然の現象である。「乳が崎冲まで」の唄が島に生まれ、「淺間の煙」の唄が信濃高原に點在する宿驛の間に生まれ、「麥ついて」の唄が伊豆南方の田舍に生まれてゐることを考へ合はせると、民謠と地方との關係をほゞ推測することができよう。たゞ民謠の優れたものは、それが口うつしに他の地方に傳はり易いから、それが土地なまりを加へて、いづれの唄がいづれの地に發生したかを見分け難いことも少くない。しかしながら、よし轉訛したとしても、その唄も土と人とを離れて行はれぬから、その轉訛に自ら地方的個性が現れてくる。例へば、「麥ついて」の歌は甲斐の南方では、

大麥ついて、麥ついて、お手にまみよ九つ。九つのまみよ見れば、
親の在所こひしよ。

(一)賀茂郡。下田町の近傍。

と唄うてゐる。伊豆南方の暖地と、自然にその調子と響とを異にしてゐるのが味ははれる。

この苗をとりあげて　どこに棲まずや。いなごや。きりすゝき
すき葦の、こやのうらに棲まずや。

これは伊豆の南方の稲生澤(いなふざは)(一)村の苗取唄である。思ふにこの歌謠は、決して近代のものではない。少くとも平安時代か、或はそれ以前に生まれたものが、その優れた秀でた調子をもつが爲に、南方の邊土に今日まで轉訛しながらも生命を存してゐるのである。歌體が幼くて、哀憐の心が充ち滿ちてゐる。この美しい心情をもつた民謠が、今日の日本に殘つてゐて、現在農夫の口に歌はれてゐることは、民族の誇とするに足ると思ふ。

「苗を取りあげた後は、いなごよ、お前はどうするのか。刈つた薄や　結(すき)きあんだ葦の小屋の中に、自分と共に住まないか。」といふその心は、何といふ單純な、同情のこもつた、愛に滿ちた心であらう。自然の中に愛に包まれて、その日の勞動をいそしみながらも、一匹の蟲にも親しい心をもつ農夫の生活が、涙

ぐましいまでに尊い。「この苗をとりあげて」は、原作は勿論「この稻を刈りあげて」であつて、それが苗取歌に轉用されたものと思はれる。この唄は他の地方にも殘つてゐるが、歌の體から考へて、伊豆のものが最も原作の形を保存してゐると想像される。

八ケ嶽（田中賴璋筆）

一の坂越し二の坂越して、三の坂越しや强清水。

これは信濃國の民謠中、出色の一である。草刈馬に乘つて、八ケ嶽の裾野を上る。一の坂がある。二の坂がある。坂を上るうちに汗が背に流れる。三の坂を越せばそこに清水が湧いてゐる。齒に冷たくしみ入るほどの强清水が湧いてゐるといふ意で　草刈の男女に唄はれることによつて　この唄の趣が深い。そして、どこかに高山國らしい調子が現れてゐる。暖地の濕潤に對して、山國は乾燥してゐる。南の明るさは暖かいが、山國の明るさは寒い。それが、これ等の民謠の中にも現れてゐるのである。

一五　古文學に見えた祖先の面影

奈良時代以前のおもな文學は、古事記、(一)日本紀の中に在る百八十餘首の歌と、(二)延喜式の中に在る祝詞とである。祝詞は神に祈る詞であるが、その中最も文學的價値のあるものは、大祓詞と祈年祭詞とであらう。祝詞を見ると、我が國民が罪穢を忌み、清く直きを愛したこと、神を敬ひ平和を愛したことがわかる。

古事記、日本紀の歌の例として、たゞ一つ日本武尊が臨終の御歌を引かう。

いのちの　全けん人は、たゝみこも　平群の山の
くまがしが葉を、うずに挿せ、その子。

(一)日本書紀。日本紀を日本書紀といふのは弘仁以後であらうと一般にいはれてゐる。
(二)延喜五年藤原忠平の撰進した朝廷の年中行事や恒例の儀式作法を書いたもの。

これは尊が伊勢の能褒野で薨り給はんとする時、遙かに故郷の大和を思ひやつて歌はれた思國歌である。歌の大意は「我は今病の爲に、旅の空に寂しくはてるのであるが、それにつけても故郷の汝等を思ふの情に堪へぬ。あはれ故郷の命全く身の健かならん人よ、むかし我が汝等と共に取つてかざして遊んだあの平群の山のくまがしの葉を髪飾として、樂しく遊べよかし。我が愛する故郷人よ。」といふことであらう。

日本武尊能褒野陵

旅路に惱み、死に臨んで故郷をしのぶのは人情の自然で、珍しくもないが、毒氣に中り、恐しい苦悶を重ねて死ぬる間際に、遙かなる故郷人に語を

寄す。命全けん人は、平群のくまがしをかざし、陽氣に遊んで人生を樂しめかし。」といはれた御心持はどうであらう。この樂天的、積極的、向上的、光明的な勇ましい氣象は、いかにも有難いものではないか。

日本武尊はいろいろな點で、大和民族の固有性を備へて居られた方であつた。性質は極めて聰明で、そして武勇は絶倫であつた。熱したら矢も楯もたまらぬ多血性で、兄君をつかみひしいで、こもに包んで投捨てるといふ亂暴をされるが、それでゐて、君父の命には從ふといふ優しいところがあつた。東西の兇賊を手もなく平げられる武勇があつて、それで姿はといふと、女裝すれば川上梟帥の目をも欺く美容があつた。人を信じて、群る夷の間に直往して火攻に逢ふ。劍でその火を薙返して夷を鏖にする。伊勢では「熊襲を漸く平げた私に、すぐ蝦夷征伐の勅命のあるのは、父帝が死ねよとの御心でありませうか。」と叔母命に泣いて語られたが、やがて涙ををさめ

て夷を平げられる。死なうといふ間際に、達者な人は遊び樂しめと勸められる。いろいろな積極的性質のおもしろく調和した、實に愉快な御性格ではあるまいか。

日本武尊は世に在した時は、自ら「我が心常には空よりも翔り行かんと思ふ。」といはれたが、薨れまして後は、白鳥となつて、威勢よく美しく天に翔つて行かれたと申すことである。くまがしに白鳥。私はこの二つが大和民族の堅實な性質と、清潔、優美を愛する性質と、足下を固める着實性と、高きに憧れる向上心とを表す標章として、實にふさはしいものと思ひ、さうして、これが日本武尊といふ上代の代表的英傑に繫がつてゐることをおもしろく思ふ。日本の國民性が凝固つて、日本武尊となつたのではないかと思ふ。

次に奈良時代の文學を代表すべき作物は、古事記と萬葉集とである。古事記は神代の大昔から推古天皇に至るまでの言傳ひを筆

記したもの。萬葉集は奈良時代の歌人の作を中心とした上代の歌集である。さうして、二つともに昔の日本民族の純な面影を見るべき古文學の寶典である。古事記の趣を示す一例として、須佐之男命が高天原に上られた時に、天照大神が命を待ちつけて詰問される一節を引かう。

「山川悉に動み、國土皆震りき。ここに天照大御神聞きおどろかして、あがなせの命の上り來ますゆゑは、必ず善しき心ならじ。あが國を奪はんとおもほすにこそと詔り給ひて、即ち御髮を解き御みづらに纏かして、左右の御みづらにも、御かづらにも、左右の御手にも、各八尺の勾瓊の五百津のみすまるの珠を纏持たして、背には千入のゆぎを負ひ、比良には五百入のゆぎを附け、またいつの竹鞆を取佩ばして、弓腹振立てて、堅庭は向股に踏みなづみ、沫雪なす蹶散かして、いつの男建び踏建びて、待問ひ給はく、何故上

り來ませると問ひ給ひき。」

大意は、「須佐之男命は山川國土を震動させて、天照大神御領の高天原に上つて來られた。大神は聞し召し驚かせられて、弟の命が恐しい權幕で上つてくるのは、きつと善意ではあるまい。察するに我が國を奪はんの下心であらうと仰せられて、早速凛々しい男裝に改めさせられ、髪を解いて角髪に結び、左右の御角髪にも、御かづらにも、左右の御手にも、玲瓏燦爛たる勾玉を緒に通したのを纏うて、輝くばかりに裝はせられた。なほ武器には千本入、五百本入のゆぎを前後につけ、左手の臂には立派な鞆を佩び、弓腹を振立てて、堅い庭に向股まで踏みぬかんばかり力足を踏張り、土くれをば沫雪の如く蹴散らかして、御稜威あたりを拂ふ御武者ぶるひゆゝしく、居丈高に立ちはだかつて、命の見えるを待ちつけて、何故の入國ぞと問はせられた。」といふことである。土から掘出したやうなうぶな趣

居丈高
立ちはだかる

と、鐵のやうな強い力と、花のやうな優しい美しさとが、微妙に調和してゐるやうに思はれる。天照大御神の氣高い、勇ましい御姿が、雄壯剛健な大文字の中に躍動してゐるやうに思はれる。

我等の祖先の面影の古文學に見えた趣は、まづこのやうなものであつた。

——五十嵐力「作文三十三講」による——

一六　春は曙

清少納言

四季

春は曙。やうやう白くなり行く山ぎは少しあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。

夏は夜。月の頃はさらなり。闇もなほ螢とびちがひたる。雨などの降るさへをかし。

秋は夕暮。夕日花やかにさして、山の端いと近くなりたるに、烏の

ねどころへ行くとて、三つ四つ二つなど飛行くさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆる、いとをかし。日入りはてて、風の音、蟲の音などいとあはれなり。

冬はつとめて。雪の降りたるはいふべきにもあらず。霜などのいと白く、またさらでもいと寒きに、火など急ぎおこして、炭もてわたるもいとつきづきし。晝になりてぬるくゆるびもて行けば、すびつ、火桶の火も、白き灰がちになりぬるはわろし。

ふるものは

雪。霰。みぞれはにくけれど、雪の眞白にてまじりたるをかし。雪は檜皮葺いとめでたし。少し消えがたになりたるほど、またいと多うは降らぬが、瓦の目毎に入りて、黑う眞白に見えたる、いとをかし。時雨、霰は板屋。霜も板屋、庭。

雲は

白き。紫。黑き雲あはれなり。風吹くをりの雨雲。明けはなるゝほどの黑き雲の、やうやう白うなり行くもいとをかし。

月のいと明き面に、薄き雲いとあはれなり。

あてなるもの

水晶の珠數。藤の花。梅の花に雪のふりたる。いみじう美しき兒のいちごくひたる。

木の花は

梅は濃くも薄くも紅梅。櫻の花びら多きに、葉色濃きが、枝細くて咲きたる、藤の花、しなひ長く色よく咲きたる、いとめでたし。卯の花は品劣りて何となけれど、咲く頃のをかしう、杜鵑の蔭に隱るちんと思ふにいとをかし。祭の歸さに紫野(一)のわたり近きあやしの家ども、おどろなる垣根などに、いと白う咲きたるこそをかしけれ。青色の衣の上に白き單がさねかづきたるやうにて、いとをかし。

(一)山城國（京都府）愛宕郡大德寺邊の舊名。

○四月の晦、五月の朔などの頃ほひ、橘の濃く青きに、花のいと白く咲きたるに、雨の降りたるつとめてなどは、世になく心あるさまにをかし。花の中より實の黄金の玉と見えて、いみじくきはやかに見えたるなど、朝露に濡れたる櫻にも劣らず、杜鵑のよすがとさへ思へばにや、なほ更にいふべきにもあらず。

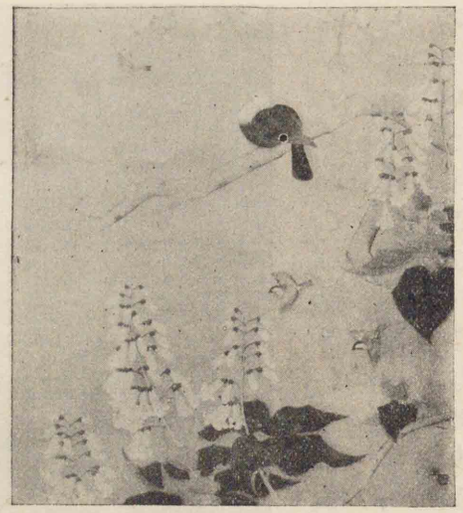
梨の花（木村響泉筆）

梨の花世にすさまじくあやしきものにして、目に近く、はかなき文つけなどだにせず。愛敬おくれたる人の顔など見ては、たとひいふも、げにその色よりして愛なく見ゆるを、もろこしに限りなきものにて、文にも作るなるを、さりともあるやうあらんとて、せめて

さりともあるやうあらん

見れば、花びらのはしに、をかしき匂こそ心もとなくつきためれ。さてはなほいみじうめでたきことは類あらじと覺えたり。

桐の花、紫に咲きたるはなほをかしきを、葉のひろごり、さまうたてあれど、また他木どもとひとしういふべきにあらず。もろこしにことごとしき名つきたる鳥の、これにしも住むらん、心ことなり。まして琴に作りてさまざまなる音の出でくるなど、をかしとは世の常にいふべくやはある、いみじうこそはめでたけれ。



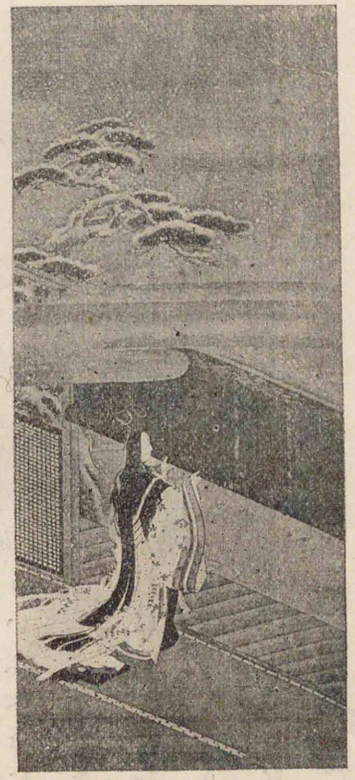
桐の花（木村響泉筆）

木のさまぞにくげなれど、あふちの花いとをかし。枯ればなにさまことに咲きて、必ず五月五日に逢ふもをかし。

香爐峰

雪いと高く降りたるを、例ならず御格子まゐらせて、すびつに火おこして、物語などして集りさむらふに、「少納言よ、香爐峰の雪はいかならん。」と仰せられければ、御格子あげさせて、御簾高く卷上げたれば、笑はせ給ふ。人々も皆さることは知り、歌などにさへうたへど、思ひこそ寄らざりつれ。なほこの宮の人には、さるべきなめり。」といふ。

——枕ノ草子——



清少納言（高嵩谷筆）

(一)支那の江西省九江縣の西南。
(二)一條天皇の皇后定子。
(三)白居易の詩、「香爐峰雪撥レ簾看。」

一七　舟旅

紀貫之

別離

九日。つとめて、大湊より那波の泊をおはんとて漕出でけり。これかれ互に國の境のうちはとて、見送りにくる人あまたがなかに、藤原言實、橘季衡、長谷部行政等なん、御館より出で給ひし日より、ここかしこに追ひくる。この人々ぞ志ある人なりける。この人々の深き志は、この海にも劣らざるべし。これより今は漕ぎはなれて行く。これを見送らんとてぞ、この人どもは追來ける。かくて漕行くまにまに、海のほとりに留る人も遠くなりぬ。舟の人も見えずなりぬ。岸にもいふことあるべし、舟にも思ふことあれどかひなし。かゝれどこの歌を獨言にしてやみぬ。

おもひやる心は海を渡れども
ふみしなければ知らずやあるらん

かくて宇多の松原を行過ぐ。その松の數いくそばく、幾千年へた

(一)承平五年（一五九五年）月。前年十二月二十一日土佐國（高知縣）出發。
(二)同國長岡郡と香美郡との間の港。今は不詳。
(三)同國安藝郡に在る。今は奈半利村といつてゐる。泊をおふ
(四)香美郡の赤岡。

りと知らず。本ごとに浪打寄せ、枝ごとに鶴ぞ飛びかふ。おもしろしと見るにたへずして、舟人のよめる歌、

見渡せば松のうれごとにすむ鶴は
ちよのどちとぞ思ふべらなる

とや。この歌は所を見るにえ勝らず。

かくあるを見つゝ漕行くまにまに、山も海もみな暮れ、夜ふけて、西東も見えずして、天氣のこと、檝取の心にまかせつ。男もならはぬはいとも心細し。まして女はふなぞこに頭をつきあてて、音をのみぞ泣く。かく思へば、舟子、檝取はふなうた歌ひて、何とも思へらず。

海路

十六日。風浪やまねば、なほ同じ所にとまれり。たゞ海に浪なくして、いつしか深崎といふ所渡らんとのみなん思ふを、風、浪ともに止むべくもあらず。或人のこの浪たつを見てよめる歌、

うれ

思へらず

(一)安藝郡津呂村。

霜だにも置かぬかたぞといふなれど
なみの中にはゆきぞふりける

さて舟に乗りし日よりけふまでに、二十日あまり五日になりにけり。

紀貫之

十七日。曇れる雲なくなりて、曉月夜いとおもしろければ、舟を出して過行く。この間に雲の上も、海の底も、同じ如くになんありける。

曉月夜

うべも昔の男は、

(一)棹はうがつ波の上の月を
舟はおそふ海の中の天を

(一)「棹穿波底月。航壓水中天。」(賈島)

とはいひけん、聞きさしに聞けるなり。或人のよめる、

水底の月の上より漕ぐふねの
さをにさはるは桂なるべし

これを聞きて或人のまたよめる、

かげ見れば波の底なるひさかたの
空こぎわたる我ぞわびしき

かくいふ間に、夜やうやく明行くに、檝取等「黒き雲にはかに出で來ぬ。風も吹きぬべし。御舟かへしてん。」といひてかへる。この間に雨降りぬ。いとわびし。

都歸

十一日。雨いさゝか降りて止みぬ。かくてさし上るに、東の方に山の横ほれるを見て人に問へば、八幡の宮といふ。これを聞きて喜びて、人々拜み奉る。山崎の橋見ゆ。嬉しきこと限りなし。ここに相應寺の邊に、暫し舟をとゞめて、とかく定むることあり。この寺の岸の邊

(一)二月十一日。横ほる
(二)男山八幡宮。
とかく定むることあり

に柳多くあり。或人この柳の影の川の底に映れるを見てよめる歌、

さゞれ涙よするあやをば青柳の
かげのいとして織るかとぞ見る

十六日。げふの夕つ方、京へのぼる序に見れば、山崎のたなる小櫃の繪も、まがりの法螺の形もかはらざりけり。賣る人の心をぞ知らぬとぞいふなる。かくて京へ行くに、島坂(一)にて人あるじしたり。必ずしもあるまじきわざなり。立ちて行きし時よりは、くる時ぞ人はとかくありける。これにもそれにも、かへりごとす。

夜になして京には入らんと思へば、急ぎしもせぬほどに、月出でぬ。桂川の明きにぞ渡る。人々のいはく、「この川飛鳥川(二)にもあらねば、淵瀬更に變らざりけり。」といひて、或人のよめる歌、

ひさかたの月におひたる桂川
そこなる影もかはらざりけり

(一)山城國（京都府）乙訓郡石塔寺の南。あるじす
(二)「世の中は何か常なる飛鳥川、きのふの淵ぞけふは瀬になる。」（古今集、よみ人しらず）

そでひづ

また或人のいへる、

天ぐものはるかなりつる桂川
そでをひでても渡りぬるかな

今田禮吾

また或人のよめる、

かつら川わがこゝろにも通はねど
おなじ深さにながるべらなり

京の嬉しきあまりに、歌もあまりぞ多かる。夜更けてくれば、所々も見えず。京に入立ちて嬉し。家に至りて門に入るに、月あかければ、いとよく有様見ゆ。聞きしよりもまさりて、いふがひなくぞこぼれ破れたる。家を預けたりつる人の心も荒れたるなりけり。中垣こそあれ、ひとつ家のやうなれば、のぞみて預れるなり。されば、たよりごとに、物も絶えず得させたり。今宵かゝることと、聲高にものもいはせず、いとはつらく見ゆれど、志をばせんとす。

志はせん

さて池めいて、窪まり水つける所あり、ほとりに松もありき。五年六年のうちに、千年や過ぎにけん、片枝はなくなりにけり。今生ひたるぞまじれる。大方皆荒れにたれば、哀とぞ人々いふ。思ひ出でぬことなく思ひこひしきがうちに、この家にて生まれし女子も、もろともに歸らねば、いかがは悲しき。舟人も皆子抱きてのゝしる。かゝるうちになほ悲みに堪へずして、密に心知れる人といへりける歌、

うまれしもかへらぬものを我が宿に
小松のあるを見るが悲しさ

とぞいへる。なほあかずやあらん、またなん、

みし人を松のちとせに見ましかば
遠くかなしきわかれせましや

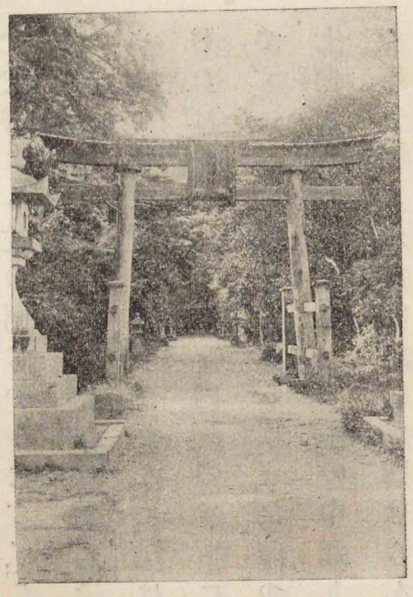
忘れ難く、口惜しきこと多かれど、えつくさず。

——土佐日記——

一八　蟻通の明神

清少納言

(一)蟻通の明神、貫之が馬のわづらひけるに、この明神のやませ給ふとて、歌詠みて奉りけんに、やめ給ひけん、いとをかし。この蟻通とつけたる意は、まことにやあらん、昔おはしましける帝の、たゞ若き人をのみ思し召して、四十になりぬるをば失はせ給ひければ、他の國の遠きに行きかくれなどして、更に都のうちにさるものなかりけるに、中將なりける人の、世の覺めでたく、心なども賢かりけるが、七十近き親二人をもたりけるが、かう四十をだに制あるに、ましていとおそろしとおぢ騷ぐを、いみじう孝ある人にて、遠き所には更に住ませじ、一日に一たび見では、えあるまじとて、密に夜々家の内の土を掘りて、その内に屋を建てて、それに籠めすゑて、行きつゝ見る。おほやけにも人にも、うせ隱れたる由を知らせてあり。世に立ちまじらはんをこそ嫌ひ給はめ、家に入りゐたらん人をば、知らでもおはせかし、うたてありける世にこそ。親は上達部などにやありけん、いと心賢く、萬づのこと知りたりければ、この中將若けれど才あり、いたり賢くして、めでたしと思すなりけり。唐土の帝、この國の帝をいかで謀りて、この國討取らんとて、常に試み、爭事をして送り給ひけるに、つやつやとまろに美しげに削りたる木の二尺許あるを、これが本末いづかたぞ。」と問ひ奉りたるに、すべて知るべきやうなければ、帝思し召し煩ひたるに、いとほしくて、親の許に行きて、かうかうのことなんあるといへば、「たゞはやからん川に、たちながら横ざ



蟻通明神

(一)和泉國（大阪府）泉南郡長瀧村。

まに投入れ見んに、かへりて流れん方を、末と記して遣せ。」と教ふ。參りて我しり顔にして、「試みはべらん。」とて、人々具して投入れたるに、さきにして行く方に印をつけて遣したれば、實にさなりけり。また二尺許なる蛇の同じやうなるを、「これはいづれか雄雌。」とて奉れり。また更に人え知らず。例の中將行きて問へば、「二つを並べて、尾の方に細きすはえをさしよせんに、尾はたらかさんを雌と知れ。」といひければ、やがてそれを內裏のうちにてさしければ、實に一つは動かさず、一つは動かしけるに、また印つけて遣しけり。ほど久しうして七曲にわだかまりたる玉の中通りて、左右に口あきたるが小さきを奉りて、「これに緒通して賜はらん、この國に皆しはべることなり。」とて奉りたるに、いみじきものの上手もえしはべらず。そこらの上達部より始めて、ありとある人知らずといふに、また行きて、かくなんといへば、「大きなる蟻を二つ捕へて、腰に細き絲をつけ、またそれに今少し太きをつけて、あなたの口に蜜を塗りて見よ。」といひければ、さ申して蟻を入れたりけるに、蜜の香を嗅ぎて、實にいと疾う穴のあなた口に出でにけり。さてその絲の貫かれたるを遣したりける後になん、なほ日本は賢かりけりとて、後々はさることもせざりけり。この中將をいみじき人に思し召して、「何事をし、いかなる位をか賜はるべき。」と仰せられければ、更に官位をも賜はらじ。たゞ老いたる父母の隱れ失せてはべるを尋ねて、都に住ますることを許させ給へ。」と申しければ、「いみじう易きこと。」とて許されにければ、萬づの人の親これを聞きて、喜ぶことといみじかりけり。中將は大臣までになさせ給ひてなんありける。さてその人の神になりたるにやあらん、この明神の許へ詣でたりける人に、夜現れて宣ひける、

七わだにまがれる玉の緒をぬきて
ありどほしとも知らずやあるらん

と宣ひけると、人の語りし。

一九　春秋の爭

津田左右吉

自然界は、平安時代の人に取つては、人世の歡樂を助けるものとしてのみ價値があつたのである。換言すれば、彼等は自然界を以て人の翫弄すべきものと考へてゐた。奈良時代の人は、單純な小兒らしい態度で自然の美しい色と聲とを愛し、或は自然を我が氣分に融合させたのであつた。然るに平安時代の貴族に取つては、花も鳥も彼等に翫弄される爲に、咲きもし鳴きもしなければならぬのであつた。だから花も月も人の見る爲のものときめて置いて、花を散らす風には吹くなと命じ、月を隱す雲には去れよといひ、傲慢な態度で自然を驅使しようとする。さて翫弄されるものは、小さいもの、美しいものである。現に「何も何も小さきものはいと美し。」（枕ノ草子）と

——枕ノ草子——

(一)「うつくしきもの」の條。

いつてゐる。雄大、傀偉、森嚴、凡そその威力の人を壓し、その活動の人を恐れさせるものは、もとより翫弄すべきものでない。自然界に於て優美な羸弱な方面のみを愛するといふことは、奈良時代の人からすでにさうであつたが、平安時代になると、貴族等の氣風が益羸弱になると共に、それが一層甚だしくなつたばかりでなく、かういふ特殊な理由も加つてゐる。

特に狹隘で、優美で、且つ小規模である平安京の山水を天地として、それより外には出ることを好まなかつた當時の都人士は、山川の遊覽を興あるものとした奈良時代の人とは違つて、平素見馴れてゐる小さい美しい自然界と少しでも樣子の變つた光景に接すると、殆どその前に戰慄するばかりであつた。枕ノ草子開卷第一に「春は曙」と書出した一節を見るがよい。すべてが小さく美しく優しいではないか。怖しきもの」に「つるばみの笠。やけたる所。みづぶき。菱。髮

多かる男の頭洗ひてほすほど。栗のいが。」のみを擧げたのを見ると、怖しいものさへ、小さいものばかりであるのに驚かれる。古今集以下の撰集を見ても、家集を讀んでも、その題材となつてゐるのは、花鳥の色と音とでなければ、美しい月の影、優しい蟲の聲々である。萬葉に見えるほどの山水の眺も、殆どなくなつてしまつた。その歌が春秋に多くして夏冬に少いのも、美しく優しい眺が春秋に多いからである。(和泉式部に「世[一]の中は春と秋とになしはてて、夏と冬との」なからましかば。」といふ歌がある。)夏ならば「階[二]のもとの薔薇、けしきばかり咲きて、春秋の花盛よりもしめやかにをかしき」(源氏)眺か、冬ならば「雪[三]高う降りて今もなほ降るに、五位も四位も、色麗しう若やかなるが……紫の指貫も雪にはえて、濃さまさりたるを着て、あこめの紅ならずば、おどろおどろしき山吹を出して、からかさをさしたる」(枕草子)美しさをのみ賞した。野分でさへも、源氏の野分の卷や、

(一)和泉式部集卷二。
(二)源氏物語賢木の卷。
(三)「雪高う降りて」の條。

枕の「野分のまたの日こそ」の一節を見ると、凄じいより寧ろ美しい。平安時代の人は、何ものについても、優美な點をのみ見出してゐる。

ここに春秋の爭といふことがある。これは萬葉からすでに見えてゐることで、かの額田王の歌には秋を選んである。平安時代になつては、伊勢物語に

雁なきて菊の花さく秋はあれど
はるの海べにすみよしの濱

の歌があるが、選擇の主意が明らかに說いてない。貫之は

春秋[一]に思ひ亂れてわきかねつ
ときにつけつゝうつる心は

と、どちらにも都合のよいことをいつてゐる。承香殿[二]のとし子の

おほかたの秋に心をよせしかど[三]
花見るときはいづれともなし

(一)拾遺集雜の部。
(二)藤原千兼の妻。宇多天皇の女御。
(三)拾遺集雜の部。

もほゞ同様で、一應は秋に心を寄せたといふものの、その理由が明らかでない。たゞよみ人しらずの

春はたゞ花の一重にさくばかり[一]

ものゝあはれは秋ぞまされる

に至つて、「もののあはれ」の一轉語を下して、秋に旗を擧げた。あはれといふからには、春よりも秋に人の心が動かされることが深いといふのであらうが、それは何故であらうか。源氏の薄雲の卷にその主人公が、

年の内、行きかはる時々の花紅葉、空の氣色につけても、心のゆくこともはべりにしがな。春の花の林、秋の野の盛をなん、昔よりとりどりに人爭ひはべりける。その頃の、げにと心よるばかりあらはなる定めこそはべらざなれ、唐土には、春の花の錦に如くものなしといひはべるめり。やまと言の葉には、秋のあはれを取立て

(一)拾遺集雜の部。

て思へる、いづれも時々につけて見給ふに、目移りて、えこそ花鳥の色をも音をも辨へはべらね。狹き垣根の内なりとも、そのをりをりの心見知るばかり春の花の木をも植ゑわたし、秋の草をも掘移して、いたづらなる野邊の蟲をも住ませて、人に御覽ぜさせんと思ひ給ふる。

目移る

といつた語がある。これにも春秋をいづれとも判斷してゐないが、「秋のあはれ」の成語を引いてゐるのに、秋草の色と蟲の音とを考へてゐることを注意しなければならぬ。春を飾る花鳥の色と音とに對して、秋の特殊な情趣を示すこの風物が、「もののあはれ」を一入深く感じさせるものだとすれば、かの歌に、春より秋を選んだのは、爛漫たる櫻の花の華やかなよりは、寧ろ萩やをみなへしのひたすらに優しく、小さく、女らしい弱々しさのあるのに、心が引かれたのであらう。春の花の一重に咲くばかりとして、それよりも秋を取つた

のだから、千草の花の種々なのが、一層美しい故とも解せられるが、その千草の色には、春の花に求められない優しさと弱々しさとがあるのである。さうして、ここに平安時代の人の嗜好が現れてゐるのではなからうか。同じく秋を取つても、華やかな紅葉を手折らうとする額田王とは、理由の違ふところが看取される。

さて美しい小さい眺を愛する自然の傾向として、觀察は頗る細かくなつた。桃の木の若枝の多くさし出たのを「片つ方は青く、いま片つ方は濃く艶やかにて、蘇枋のやうに見えたる。」(枕草子)といひ、「いりはてぬる山際に、光のなほとまりて明う見ゆるに、薄黄ばみたる雲のたなびきたる。」(同上)といひ、「明離るゝほどの黒き雲の、やうやう白うなりゆく」(同上)といふなども色の觀察、または「おほとなぶらはまゐらで、長すびつにいと多くおこしたる火の光に、御几帳の紐のいと艶やかに見え、御簾の帽額のあげたる鈎のきはやかなるも、け

(一)「正月十日」の條。
(二)「日は」の條。
(三)「雲は」の條。
(四)「心にくきもの」の條。

ざやかに見ゆ。」(同上)といひ、「『あり明の月のありつゝも。』とうちいひて、さしのぞきたる髪のかしらにもより來ず、五寸ばかりさがりて、火ともしたるやうなる月の光。」(同上)といふ光線の描寫などの精緻な筆つきを見るがよい。細かい點をいふと、蚊の羽風さへ清女の筆にのぼつてゐる。これ等は宇津保に「旦の霞、綠の衣なり。夕べの雲、黄なる錦なり。」などとある漢文直譯流のものとは違つて、深切な實際の觀察から來たものである。源氏の風景の描寫は枕ほど纖細ではないが、その代り、いかにも生きてゐる。よくその風韻を寫し、全體としての情趣を髣髴せしめる手腕は、また格別であるといつてよい。ただ清少納言は紫式部のやうに人情の微を穿つ眼がなかつただけ、目に見えるものの觀察は甚だ鋭敏である。それはこの女一個人の特長ではあるものの、やはり時代の生んだものであることはいふまでもない。

(一)「ある所に」の條。
(二)宇津保物語。二十卷。源氏物語よりも以前に出た小說。作者未詳。
(三)「春日詣の」條。

二〇　花と蝶

藤井高尚

花

春くれば、咲かざりし木草の花もあまた咲きいづる中に、それかれとかずまへいふ限りはさらなり、名も知らぬも、をかしう見ゆるは、をりからなめり。あるはいとよく晴れたる朝日の、のどかなる影ににほひあひて、ひときは美しう、あるは霞める月の影の心にくきに、ほのぼの見ゆるがいひ知らぬなど、あだし時にかゝらんやは。さるをかしきをりに、また類なき櫻の咲出でたるよ、いかでかはなのめならんとぞ。

あだし時

蝶

莊周が夢のうちに身をかへて胡蝶となりしといへるは、もとよりそら言ながら、をかしきふるごととて、昔より歌にも文にも作りあへり。さるは、胡蝶といふもの、見る目もいと美しく、名さへにくからぬ故ぞかし。蓑蟲などになりたる夢物語ならば、かゝらんやは。花園に、はじめは三つ四つと數ふるばかり稀に見えしも、いづくよりか來つらん、あまたになりて、空にとび、木がくれをゆく。あしたには露にぬれて小さき羽も重きにやあらん、立ちかねて、なほ花びらにすがりて眠りゐたるに、風のさと吹きくれば、驚きておのれも亂れ飛び、夕べにはねどころを爭ふにやあらん、ここかしこの花にすだきて、たちゐひまなきがをどるやうに見ゆるなど、いとをかし。ましてやんごとなきわたりの前栽の花にすみて、玉簾近くとびありきたらんは、あひあひて、ひたひつきも羽衣も、ひときはあてに美しうぞ見ゆらんかし。

二一　船上山行幸

(一)かの島には、春來てもなほ浦風冴えて、浪荒く、渚の氷も解けがたき世のけしきに、いとど思しむすぼるゝこと盡きせず、かすかに心細き御すまひに、年さへ隔りぬるよと、あさましく思さる。さぶらふ人々も、しばしこそあれ、いみじくくんじにたり。ことしは元弘二年(二)といふ。閏二月あり。後のきさらぎのはじめつ方より、とりわきて密教の秘法を試みさせ給へば、夜も大殿ごもらぬ日數經て、さすがにいたうこうじ給ひにけり。

心ならずまどろませ給へる曉方、夢現ともわかぬほどに、(三)後宇多院ありしながらの御面影さやかに見え給ひて、聞えしらせ給ふこと多かりけり。うちおどろきて、夢なりけりと思すほど、いはん方なく名殘かなし。御涙もせきあへず、(四)「さめざらましを」と思すもかひな

(一)隱岐の島。

(二)後醍醐天皇の御代(一九九二年)。

(三)後醍醐天皇の父君。

(四)『思ひつゝぬればや人の見えつらん、夢と知りせば覺めざらましを。』(古今集、小野小町)

船上山

谷口香嶠筆

あま人

し。源氏の大將、須磨の浦にて父御門見奉りけん夢の心ちし給ふも、いとあはれにたのもしう、いよいよ御心强さまさりて、波路はるけき釣舟も、たよりいできなんやと待たるゝ心ちし給ふに、大塔の宮よりも、あま人のたよりにつけて、聞え給ふこと絶えず。

勤行の夕（植中直齋筆）

都にもなほ世の中しづまりかねたるさまに聞ゆれば、よろづに思し慰めて、關守のうち寢るひまをのみ窺ひ給ふに、然るべき時の到れるにや、御垣守にさぶらふつはものどもも、御氣色をほの心えて、靡きつかうまつらんと

思ふ心つきにければ、さるべき限り語らひ合はせて、同じ月の二十四日の曙に、いみじくたばかりて、かくろへゐて奉る。いとあやしげなるあまの釣舟のさまに見せて、夜深き空の暗きまぎれにおしいだす。をりしも霧いみじう降りて、行先も見えず、いかさまならんと危けれど、御心をしづめて念じ給ふに、思ふ方の風さへ吹きすゝみて、その日の申の時に、出雲の國に着かせ給ひぬ。ここにてぞ人々心ちしづめける。

同じ二十五日、伯耆國稻津浦といふ所へ遷らせ給へり。この國に奈和の又太郎長年といひて、あやしき民なれど、いとまうに富めるが、類ひろく、心もさかさかしく、むねむねしきものあり。彼がもとへ宣旨を遣し給ひたるに、いとかたじけなしと思ひて、とりあへず、五百餘騎の勢にて御迎に參れり。またの日、賀茂の社といふ所にたち入らせ給ふ。都の御社思し出でられて、いとたのもし。それより船上

むねむねし

(一)伯耆國（鳥取縣）東伯郡。

寺といふ所へおはしまさせて、九重の宮になずらふ。これより國々のつはものどもに、御敵を亡すべきよしの宣旨を遣され、比叡の山へものぼされけり。

——增鏡——

日本文學〔自修文〕

優美閑雅な日本語を使つて　平和柔順な國民が歌つた歌、それには長歌も短歌もあるが、これ等の歌が日本文學の基礎といつてよろしい。四圍の美しい自然を歌つて、人事もすべて自然の譬喩に寄せられて居ることが、早く後世の文學の特質を示して居る。古事記、日本紀の歌、萬葉集の歌などは即ちそれ等の國民歌の幾分かを傳へたもので、推古以來支那の文明が傳はつて、だんだんと漢文漢詩が用ひられるやうになつても、日本固有な歌は、それとは

柿本人麿（小堀鞆音筆）

別途に發達した。殊に上代からの神祇を祭る詞、祝詞の形式を應用して、寧ろ漢詩に對抗して、特殊な國民思想を歌つたのが、柿本人麿、山部赤人等の先輩歌人で、續いて奈良時代の大伴家持等である。萬葉集には漢文渡來以前の歌も多く載せてあるが、かういふ新進歌人等の歌も多い。優美典雅といふ點に於て、

山部赤人（藤原信實筆）

忠君愛國の思想に於て、よく日本國民の上代思想をあらはしたものである。

奈良時代にできた萬葉集は漢字を以て記された。漢字の音訓を用ひて、日本語を記したものである。平安時代になつて百年の後には、假名の發達があつて、平假名で自由自在に國語を記すことになつた。ここに於て、假名文の發達が著しくなつた。萬葉集の後をついで、古今集以下の勅撰和歌集ができたのみでなく、竹取物語[一]、伊勢物語を物語の祖として、數多の假名物語、日記、隨筆の類が現れた。就中有名なのは紫式部の源氏物語と、清少

（一）竹取の翁が竹の中から得た一人の美女を主人公とした我が國最古の物語。作者や著作の年代については明らかでないが、大同、延喜の間の作であらうといはれてゐる。

文藻　文章を作る上に於ての優れた氣分。

諸行無常　世の中のものは皆移り變つて行く。

愛別離苦　別れを惜しむ苦み。

納言の枕草子とで、漢學の素養がその文藻を助けたことは、見逃されぬことであるが、上古以來行はれた和歌の風流情味が、常にこれ等の文學の背景となり、基礎となつて居るのも、爭はれぬ事實である。大鏡や、榮華物語などいふ史實を記した物語も、つまりはその材料を一轉化したものである。奈良時代の和歌即ち抒情詩が、平安時代には物語即ち叙事詩と發達したのである。

鎌倉幕府の創立と共に、時代は一變した。隨つて文學も一變した。源平二氏の爭が材料に採られた保元物語や、平治物語や、平家物語や、源平盛衰記などといふ軍記物語が　佛家の諸行無常、愛別離苦の思想の下に筆述された。降つて吉野朝廷の頃の太平記も、同じく軍記物語である。平安時代の盛時とはその材料に於てこそ、それぞれ差別はあれ、叙事詩たることは同樣である。材料の變化と共に言語も變化して、漢語及び漢文脉の加つて來たことは、自らその內容と外形との調和を保たしめて居る。徒然草、方丈記なども、佛敎の盛なこの時代の著名な產物として數へられる。

足利將軍の世は、概して戰亂時代で、無學の世と稱せられて居るが、明朝と

劇詩　芝居を演ずる時に使ふ詩。

世話材料　世間話に關した材料。

集大成す　集めて大きく作りあげる。

の交通も繁く、繪畫をはじめ美術工藝の進歩も著しく、鎌倉の末からの進歩を承けて、將軍義滿の頃に至つて、能の發達大成を見るに至つたのは、大いに注意すべきことである。平安、鎌倉二時代を通じての叙事詩は、ここに至つて劇詩の形をなしたのである。能は幕政時代を通じて衰へず、今日にも傳はつてなほ盛であるのを見ても、いかにその我が國民の嗜好に投じたものであるかがわかる。その材料としては、上代の萬葉集から、中古の古今集、伊勢物語、源氏物語等は勿論、平家物語、源平盛衰記、また義經記、曾我物語などの軍記物語に及んで居り、また世話材料も入れてある。歌ふ方からいつても、音樂の方からいつても、舞の方からいつても　できるだけ當時の粹を拔いたもので、寧ろその精華を集めたものといつてもよい。あらゆる藝術の方面を集大成したものとして、當時の武士の修養に資したことは多大であつた。

徳川時代に至つては、學問の復興から、漢學が更に唐宋時代の精華を學んだのは勿論、儒學に於ては、支那に於ても稀なほどな大儒が輩出した。また國學の研究も盛になつて、久しく忘れられてゐた平安時代以前に遡つて、萬葉集も

飜刻　原版の通り再び板に刻んで印刷する。

俗文學　一般世間に行はれる文學。

樂天洒落　何事も一向氣にかけないでわだかまりのないこと。

(一)徳川第五代將軍。

(二)徳川第十一代將軍。

研究され、源氏物語も研究された。印刷の方法が進んで、古書の飜刻が盛になつて、庶民皆太平の世を樂しんで、靜かに文學を翫味する餘裕を得た。漢學、國學の勃興につれて、專ら平民社會に行はれた所謂俗文學が發達した。淨瑠璃や、小說や、俳句や、狂歌や、川柳やが、和漢古今の文學に根ざして、新しい國民思想の花を咲かせた。昌平時代の樂天洒落な氣風と、義理人情に勇み立つ犧牲的精神とが、これ等の各種の文學の上に溢れて居る。綱吉將軍(一)の元祿時代と、家齊將軍(二)の文化文政時代とが、その最大繁盛な時世であつた。淨瑠璃の近松門左衛門、俳句の芭蕉は元祿の世に屬し、小說の曲亭馬琴は文化文政の世に屬する。その他の作家は數限りもない。平民社會の嗜好に投じようとした爲、中には材料思想に鄙陋なものの少くないのは遺憾である。演劇の發達の著しかつたことも、注意すべき事がらである。かやうに平民文學の發達したのは、一面に於て平民社會の勃興を意味するので、日本の國民が東洋の諸國中、明治大正の御代を待つて大いに世界に活躍するといふ氣運が、すでにその上に示されて居るやうに感じられる。

維新以後の進歩は、ひたすら西洋文學の新味を加へたことで、東西文明の融和は、我が國文學の上に於ても、いち早く認められるのである。最初は平易な英文の小説、詩歌の飜譯から始つて、次第に佛、獨、露、瑞諸國の文學を咀嚼するに至り、歐米の新思潮は抒情詩、叙事詩、劇詩の各方面にわたつて、常に新しい傾向生命を我が文學の上に及しつゝあるのである。上古以來の國文學の研究も益盛になつて、一層根柢あり、權威あり、價値ある文學の興るのは、近き將來に期待さるべきことである。但し新奇を競ふの餘り、往々我が國體と相容れず、我が國民性と扞格する思想の輸入されることもあるので、その間の調節は大いに考慮しなければならぬのである。

咀嚼す　かみくだく。

扞格す　觸れさからふ。

二二　現代の文學　その一

干葉龜雄

我が國現代文學の源流を求めようとすれば、どうしても明治二十一年から、明治二十二三年代までに遡らねばならぬ。二葉亭四迷、

山田美妙、尾崎紅葉、森鷗外、幸田露伴、廣津柳浪の諸作家が始めて文壇に現れ、各特殊な個性と清新な色彩とのある處女作を發表し、眞の文學とはいかなるものか、また來るべき日本文學は、いかなる形式の下にあらねばならぬかを當代に示したのが、實にこの時代だからである。しかしてこれ等作家の制作の傾向は、大づかみに寫實主義と呼ばるべきものであつた。殊に紅葉、露伴の初期の作物は、井原西鶴あたりの寫實小説から專ら手法や技巧を學んだものであつたが、精神に於ては何等の影響をもそれから受けず、却つて歐洲文學の感化を含んだ跡が著しかつた。一つは坪内逍遙が、明治十八年に「小説神髓」を著して、藝術の本質を始めて理論的に闡明し、それによつて、今までとは全く違つた文學に對する新しい觀念を時代に與へて居た爲、また他の一つは、叙上の諸作家が歐洲文學に深い知識をもち、かの文學の精神を、我が國の文壇に移すことに忠實な

(一) 名は武太郎。東京の人。明治二十年前後口語體の小説集「夏木立」「口語體の歴史小説」「胡蝶」を出した。

(二) 名は直人。長崎の人。明治二十二年小説「殘菊」を出した。

信念をもつてゐたからでもある。例へば、二葉亭四迷の露文學に於ける、森鷗外の獨墺文學に於ける、當時に於ける歐洲文壇の名花の移植は、實に二家の功によることが最も多い。なほその頃に於ける寫實主義の移植を始めとし、その後今日に至るまで、我が國文壇の諸主潮の流れが、歐洲文壇のそれといつも起伏を同じくして居るのは、興味ある現象でなければならぬ。故に言葉を換へていへば、我が國文學の潮流は、明治二十一二年代に於て、始めて世界文學の潮流に仲間入したものといつても、强ち誇張ではないであらう。さらば謂ふところの寫實主義とは何かとならば、それはあるがまゝの相（すがた）をたゞあるがまゝに認め、その實象を力めて忠實に描き出さうとする態度である。だから題材を奇拔なものに求めず、反つて普通にありふれた社會の事實を取りあつかふ。例へば、紅葉が女性の種種相を描き、性情の自然な發展を寫すに力を集めた如きもそれで

ある。かくして人間の心理や事物の樣相を、できるだけ微細に描き出す必要が起ると共に、その必要に伴なはない文章體の文章が次第に小說から離れ、言文一致體が主としてその頃から採用されて來たのは、もとより當然な趨勢でなければならぬ。

その間、明治女流作家の第一人者たる樋口一葉と、神秘小說の創意を拓いた泉鏡花とが現れたが、寫實主義は明治三十年代を止りとして下り阪になり、小杉天外(二)が佛國十九世紀後半の自然派の主張を採入れ、新寫實主義を唱へるに至つて、我が國文壇は始めて自然主義時代の前期に入つた。天外のいふところは、人生そのものに善惡美醜の定まつた本質がない。小說はたゞあるがまゝの實世間を、正直に丁寧に筆記すればよいといふのである。これを以前の寫實主義に比べれば、作者の主觀的な物の觀方を排して、たゞ嚴肅な技師として忠實に人生を映寫すべきことを唱へたのが違ふとこ

(一) 名は夏子。山梨縣の人。明治二十八年始めて小說を出し、江一にごり」を出した。明治二十九年歿、年二十五。

(二) 名は爲造。明治三十年「蛇いちご」三十五年「はやり唄」を出した。

ろである。これは專ら佛國のエミイル・ゾラ(一)の傾向を學んだもので、永井荷風もまた「地獄の花」(二)の一篇によつてそれに共鳴した。

思ふに歐洲に自然主義の發生した原因は、十九世紀後半に於ける自然科學の勃興による。即ち自然主義は、從來の浪漫主義(三)、理想主義に反抗し、たゞ實驗と分析とによつて、人生から一定の法則を引出さうとするものである。故にどこまでも客觀を尊ぶ。けれどもゾラの自然主義の主張には、まだ幾分の不徹底があり、その作物も、また幾分か浪漫的な氣分を加味したやうに、天外、荷風の作物も、同時にその弊のあることを免れなかつた。然して田山花袋、島崎藤村が出るに及んで、始めて自然主義の世紀が完成した。後期自然主義といふべきはこの時代である。花袋は現實暴露、或は露骨な描寫といふ信條により、專らモーパッサン(四)、フローベル(五)の作風に法つた。即ちそのいふところによれば、人生は官能で經驗する外に、眞實なるも

(一)Emile Zola.（西暦一八四〇年―一九〇二年）

(二)明治三十五年作。

(三)英語ロマンチシズム（Romanticism）の宛字。

(四)Maupassant.（西暦一八五〇年―一八九三年）

(五)Flaubelt.（西暦一八二一年―一八八〇年）共にフランスの自然主義小説家。

のがない。しかも官能の前には、たゞ眞と僞とがあるだけで、善惡美醜といふものが有りえないから、隨つて世間がたとひどんなに醜惡と考へるものでも、それが眞實であるならば、冷靜にそれを描いて一向差支がないと。この主張は、藝術は必ず美を描くべきものだといふ既成の審美觀念を、根本から打碎いたもので、爲に自然主義といへば、必ず醜惡な人生相ばかりを寫すものだといふ常識からの批難を受けたのは、怪しむに足りない。しかし、當時熱心に自然主義を支持し强調した批評家に長谷川天溪(一)、島村抱月(二)、その他の人々がありまた德田秋聲(三)、正宗白鳥(四)、國木田獨歩(五)、岩野泡鳴等のこの派の有力な諸作家が、各特色に豐かな制作を盛に提出するやうになつて、自然主義の精彩ある展開は、殆どその頂點に達した。たゞ運命を人生に於ける不可抗力であるとし、人生のいかなる努力も悉く無効だと見る運命主義の信仰だけは、獨り秋聲、白鳥、獨歩のみにあつ

(一)名は誠也。新潟縣の人。論文集「自然主義」の著がある。

(二)名は瀧太郎。島根縣の人。早稻田大學教授。「近代文藝の研究」はその論文集。大正七年歿、年四十八。

(三)名は末雄。金澤市の人。

(四)名は哲夫。千葉縣の人。自然主義の小說家。明治四十一年歿、年三十八。

(五)名は美衛。詩人、小說家、批評家。淡路の人。大正十年歿、年四十三。

て、花袋、藤村の曾て示さなかつた自然主義の一面であつたが、かく初から人生の努力を否定し、反抗の無力を肯定するが故に、彼等の作物はすべて絶望的、虚無的であり、光を缺き、感激を失ひ、苦澁にして灰白な色彩に滿ちた。

たゞ一人この滔々たる大勢の外に超逸し、最後まで自分の個性を護り通して、異彩ある作物を多産した作家に夏目漱石がある。漱石の才能は多角多樣で、内容によつて樣式を自由に變化して行く爲に、容易に一つの主義をもつて彼を掩ふことができない。たゞ彼はいかなる傾向を擇ぶにしても、悉く自然主義の行き方と違ひ、或は正反した。恐らく彼の最も優れた傾向は、英國派心理小説の脉絡をひいた作物にあるであらうが、何にせよ、その明色と、倫理的意識と、東洋趣味的の冲澹とは、相俟つて自然主義の暗色から救はれようと欲する讀者に、多大な慰安を與へる力が籠つてゐたことは爭はれない。

二三　現代の文學　その二

自然主義の衰潮は、ちやうど大正初期に於て著しく目立つて來た。この時、あたかも歐洲に於ても、自然主義は末期に迫つた。そして人生の些事や、機械的な運命觀のみに停滯して居る自然主義に反抗して、人間の生命力を高調する現實主義の叫が到る所に聞えて來た。我が國でその現象を啓蒙的に説述した厨川白村[一]の「近代文學十講」が、忽ち數十版を重ねたことによつても、當時の我が讀書界がいかに新しい轉廻を文壇に望んでゐたかは、大凡知りえられるであらう。

けれども、たとひ我が國の自然主義全盛期にあつても、それと色の異なつた藝術が全く影を隱したといふわけではなかつた。例へ

(一)文學博士。名は辰夫。京都の人。大正十二年歿、年四十四。

ば、谷崎潤一郎の如き、日本人に珍しい異常感覺の追求によつて、新たに耽美派の一面を拓いた。彼はポー(一)の神秘と、ボードレールの頽廢味とを一つにした作家だといはれ、浪漫的色彩を最も明らかにした。けれども當時の文學思潮の傾向から見て、正面から自然主義に對抗し、また來るべき時代思潮の一面を暗示したものは、どうしても明治四十三年に於ける白樺派(二)の擡頭に指を屈しなければならぬ。白樺派は貴族の生まれである武者小路實篤(三)を盟主として、志賀直哉、有島武郎(四)等の學習院出身者を中心とし、人道愛と個性生命力との光明を高調しようとした新理想主義の一團である。人生に對する態度は、どこまでも肯定であり、積極であり、人類の將來は、一に人類內部生命の飛躍によつて、限りない幸福にし向け得るといふのが彼等の信念である。蓋しかゝる藝術思想が生まれて來たのは、大正初期に於ける當時の哲學及び外國文學の感化によること

(一) Edgar Allan Poe. アメリカの詩人、小說家。その短篇小說集に「神秘と想像の物語」といふ。(西暦一八〇九年—一八四九年)

(二) 雜誌「白樺」に據る一派の名。

(三) 東京の人。「武者小路實篤全集」がある。

(四) 東京の人。「有島武郎全集」がある。大正十二年歿、年四十六。

が最も多かつた。なぜならば、明治末期から大正初期に於て著しい壓力を以て思潮界に歡迎されたものは、露のトルストイ(一)とドストエフスキーとの論策、主義、作物であり、更に印度のタゴール(二)、佛のロマン・ローラン(三)、英のカーペンター(四)、ラッセル(五)等の思潮が雜然として流れ入り、それを補ふに、獨のオイケン(六)、佛のベルグソン(七)の新哲學を以てした。要するにそれ等の思潮は、飽くまでも人間心靈の勝利を基調とし、創造的進化の新生活を謳歌することに於て、いかなる點からも、自然主義のこの上の生存を可能にするものではなかつた。

新理想主義が一方に崛起すると共に、自然主義派に取つて代つた純藝術派の諸新人は、皆現實主義の使徒であつた。ここでもまた我が文壇は、その行き方が歐洲のそれに一致する。たゞ寫實主義も現實主義も、同じくリアリズム(八)の名で呼ばれるけれども、その二つは全く違ふ。寫實主義は主觀を頭から拔きにして、專ら外面から物

(一) Dostyevsky. (西暦一八二一年—一八八一年)

(二) Tagore. 印度の詩人。論集「生の實現」、詩集「ギタンジャリ」の著者。(西暦一八六一年—)

(三) Romain Rolland. フランスの小說家、戲曲家。「ジャン・クリストフ」の著者。(西暦一八六六年—)

(四) Carpenter. イギリスの思想家。「文明の原因と救濟」の著者。(西暦一八四四年—)

(五) Russel. イギリスの思想家。「社會改造の原理」、「自由への道」の著者。(西暦一八七六年—)

(六) Eucken. ドイツの哲學者。(西暦一八

象を描かうとするのであるが、現實主義は觀照に於てはできるだけ科學的の精確を尊ぶに拘らず、批判と省察とは、飽くまでも嚴肅な主觀に於てしようといふもので、我が國文壇に於ける現代大多數の作家は、多くか少くかこの主義に依りつゝあるものと見られる。(一)菊池寛、芥川龍之介が冷酷な諷刺によつて人間心理と現實人生相との矛盾を暴き出し、(二)里見弴、志賀直哉が精巧な技巧を以て如實の藝術自然を創造する如き、その他の作家いづれもそれぞれの個性によつて作物を生産して居るが、概して文壇の中心は現實主義を出ない。しかもこれ等の諸作家によつて築かれた現實主義の藝術は、今や新しく進出して來た多數の新作家によつて、漸く第二期の轉廻を見ようとして居る。一は、描寫する技巧が、前代の作家に比べて目覺めるほど纖巧であり、微妙であり、神經が清新であることである。二は、題材のつかみ方が驚くべきほど奇警で、垢が拔け、氣が

四六年―)
(七)Bergson. フランスの哲學者。「創造的進化」の著者。(西暦一八五九年―)
(八)Realism.
(一)文藝作家。文學士。高松市の人。
(二)小説家。本名山内英夫。東京の人。

利いて居ることである。この點に於て、彼等の新傾向は殆ど佛國文藝の精粹たるコント(一)の域に迫るものがあるといはれる。

次に現代の我が文學に注意すべきものは、社會改造の主潮といはるべき社會的意識を含んだ藝術傾向が新たに出現したことである。即ち一九一四年の世界大戰は、その終結によつて、無數の新思想と新しい社會鬪爭とを惹起したが、中にも産業組織の研究から起つた無産階級の自覺が、その思想の表現を藝術に求めようとして、謂ふところの無産階級の藝術といふものを生んだ。それは我が國にあつては、大正十二年上半期に於て最盛を極めたのであるが、たゞ徒に思想宣傳の熱意だけが強くて、藝術的情感が稀薄であるといふのが一般の不滿であつた。それがいかに大成するか否かは、たゞ將來に期する外はないが、たゞこの無産階級藝術が唱へ出されたのを機會として、現代に行はれる我が一般文學が、社會意識と

(一)Conte. 小話。短篇。

時代觀念とを含むことの乏しいことを指摘し、その點に於て既成藝術局面の新しい轉廻を要求する聲の高いことは、注意されねばならぬ。

凡そ此の如きものが、現時に於ける我が國文壇の大勢であるが、更に一二の附記すべきものがあらば、その一つは、明治末期に於ける坪内逍遙の文藝協會、小山内薫等の自由劇場その他演劇に於ける實際的の啓蒙運動に源を發して、特にこの二三年間に於て、劇に對する興味が著しく我が全文壇の中心となり、戯曲の制作に筆を着ける作家が多くなつたことである。そしてこの趨勢は恐らく年一年と熱烈になつて行くであらう。これもまた歐米文壇と傾向を等しくするもので、たゞ我が國にあつては、一はその趨勢が遲れて來た爲と、一は新脚本の上場が容易でないとの爲に、小説ほどの成長を見ることはできないが、すでにこの方面にも幾人かの優秀な

(一)小説家。新劇の鼓吹者。文學士。廣島市の人。

作家を出し、その作品には、我が國劇文學の先驅として、觀賞すべきものが決して少くない。

次に歐米文學の反譯の盛な現狀も、また藝術界一般の要求を示すものでなければならぬ。印刷術の隆昌は、世界いかなる國の文學をも自由に移植せしめ、我が國民をして、坐らにして世界藝術圖書館の廻廊に立つ感あらしめる。我が文壇がその精を拔き粹を選んで、新しい日本文學を創造し得るのは、果していつの日であらうか。何にせよ、日本文學が世界藝術の一つの光となり、更にその光が反射して、我が國民の藝術的觀念を優れて高いものにすることは、何よりも望ましいことである。

改訂帝國新讀本　卷十　終

大正三年十一月三日印刷
大正十三年十一月十六日發行
大正十四年十二月十日訂正再版發行
昭和二年二月廿二日改訂印刷
昭和二年五月廿五日改訂再版發行
昭和二年十一月廿一日改訂再版發行

（改訂帝國新讀本）

定價	
自卷一至卷四	各金四拾六錢
自卷五至卷八	各金四拾壹錢
卷九卷十	各金參拾四錢

昭臨時和三年度定價

自卷一至卷四	各金七拾六錢
自卷五至卷八	各金六拾八錢
卷九卷十	各金五拾七錢

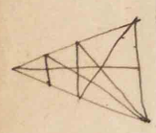
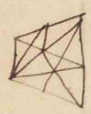
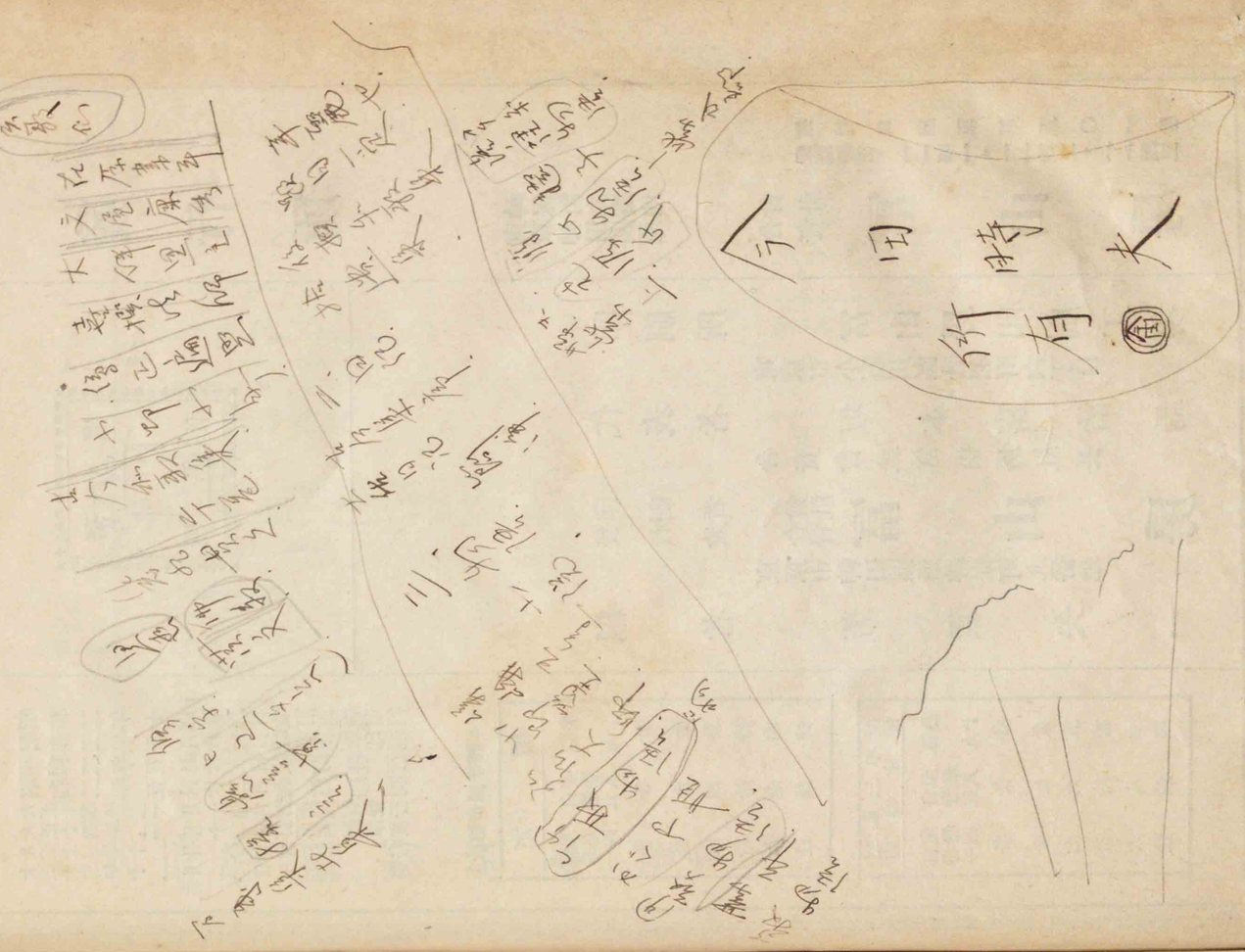
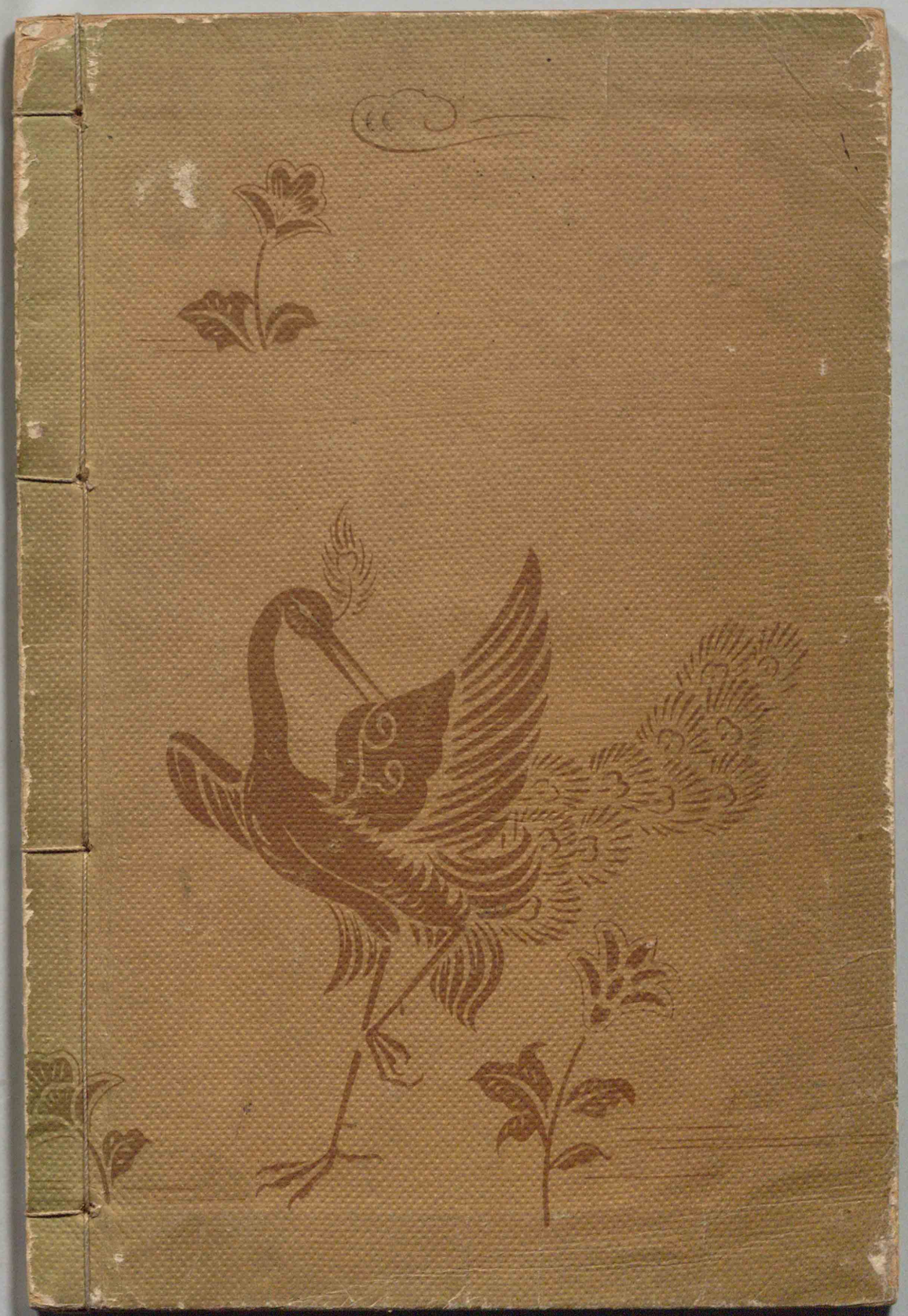
著作權所有

編者　芳賀矢一

發行兼印刷者　東京市神田區通神保町九番地　合資會社　冨山房

代表者　合資會社冨山房社長　坂本嘉治馬

印刷所　東京市小石川區音羽町六丁目　冨山房印刷工場

發行所　東京神田區通神保町九番地　合資會社　冨山房

電話神田一一四一・一一四二・一一四三
振替口座東京五〇一番